

## ヨーロッパ諸国のハロウィン (4)

ゴットフリート・コルフ (編)

河 野 眞 (訳)

### [解題]

ハロウィンをめぐってドイツ民俗学会の機関誌が2001年後期号に特集した諸論考・報告を訳出紹介している。その4回目で最終回に当たる今回は、スイス1篇、ドイツ3篇、それにシチリアの近縁な伝統行事に強く留意したイタリア人研究者の考察の合計5篇である。訳出にあたっての体裁や訳注はこれまで通りである。執筆者とタイトルを次に挙げる。

ガブリエーラ・ムーリ／ユーリ・ギュール (チューリッヒ／スイス)

ハロウィン — ハロウィナー — ハロウィンナー? — 習俗変化とイベント・カルチャーの間にあるスイスのハロウィン

Gabriela Muri und Ueli Gyr (Zürich), *Halloween – Halloweener – Hallowinner? Halloween zwischen Brauchverwandlung und Eventkultur in der Schweiz..*

ハインツ・シリング (フランフルト・アム・マイン／ドイツ) ハロウィン彗星

Heinz Schilling (Frankfurt am Main), *Komet Halloween.*

アーロイス・デーリング (ボン／ドイツ)

ライン地方のハロウィン — 研究プロジェクトへのノート

Alois Döring (Bonn), *Halloween im Rheinland – Notizen zu einem Forschungsprojekt..*

ザビーネ・デーリング＝マントイフェル (アウクスブルク／ドイツ) 現れ出たのは蠅の神

Sabine Doering-Manteuffel (Augsburg), *Zeichen vom Fliegengot.*

ニコレッタ・ディアジオ (ストラスブール) 会食と混乱と消費：食べる者たちと死者たち

Nicoletta Diasio (Strasbourg), *Communion, confusion, consommation: de la gourmandise et des morts.*

これで13篇の論文・報告を訳了したことになる。掲載を終えるにあたって言い添えれば、外国の専門誌の特集をまとめて翻訳するのはあまり例が無いと思われるが、現代フォークロア研究が大方には馴染み薄い分野であるだけに、海外の研究者の実際を概観するチャンスを関心ある人たちと共有しようとしたのである。少なくともヨーロッパでは、ハロウィンはなお実験的なテーマのはずであり、その種のものに対していかなる視点や方法や取り組みがなされ、またその水準の如何を知るよすがとなろう。それが、私たちの間での刺激になればと願っている。

ハロウィン — ハロウィンナー — ハロウィンナー？  
— 習俗変化とイベント・カルチャーの間にあるスイスのハロウィン

ガブリエーラ・ムーリ／ユーリ・ギュール (チューリッヒ)

[原タイトル] Gabriela Muri und Ueli Gyr, Zürich, *Halloween – Halloweener – Halloween? Halloween zwischen Brauchverwandlung und Eventkultur in der Schweiz.*

ドイツ・スイスのメディアが注目した最初のハロウィン・パーティーが開かれたのは、1994年と1995年だった。幾つかのトレンド・バーで、エキゾチックで恐怖をそそるような出し物が、事情通の人たちによって組織的に準備されたのである。しかしその割には、訪れる客のなかに、仮装の人々は少なかった<sup>1</sup>。雑誌の料理欄にはカボチャのレシピも取り上げられたが、読者は、貧民の食料としてのカボチャを思い出したものである。またその一年後には、チューリッヒではハロウィンが既に酒場の行事になっていることを伝える簡潔な記事に出会うことになった。もともと、そこでも触れられているように、スイス西部の人々が派手で恐ろしい装いをするのに対して、チューリッヒでは一般の客は黒い服装によって辛うじてハロウィンに合わせていた<sup>2</sup>。

ハロウィンは、スイスでは20年前までは、アメリカ人やアメリカを訪れたことのある人たちが断片的にお祭りをする程度に過ぎなかった。しかし1990年代を通じて、スイス西部から徐々に広まってスイス・ドイツ人の間に広く普及するようになり、やがて大規模な習俗変容の一部となった。そうした推移は、マーケットの側と受容者の側の両方にみとめられる。まず商品を提供する側がハロウィンを発見したのは1997年で、以来、ハロウィンは広範なマーケット戦略の一部となった。またその広まりに際してスイスで大きな影響を及ぼしたのはメディアであった。1980年代からスイスの映画館でも上映されたハロウィンのクラシック作品から、映画『E.T.』<sup>1</sup>のなかのハロウィンの場面を経て、ハリー・ポッ

<sup>1</sup> 参照, [www.winti.ch/wiwo/Archiv/1999/43/hallowe](http://www.winti.ch/wiwo/Archiv/1999/43/hallowe). このHPにはヴィンタートゥアー市 (Winterthur) での事情通によるハロウィン・パーティーについて報告されている。なおこれも含めて、他にもハロウィンに関して価値の大きい情報を得たことについては、民俗研究者ベルトラウト・ベルヴァルト女史 (Waltraut Bellwald) のハロウィン・アルヒーフに感謝する。

<sup>2</sup> Ruth Brüderlin, *Happy Halloween. Der amerikanische Brauch wird auch in den Zürcher Stuben gefeiert* (ハッピー・ハロウィン／アメリカの行事がチューリッヒでも祝われる). In: Tages-Anzeiger, 4. November 1996, S:17.

ターに至る一連の作品である。それに加えて、映画製作のニュースやハロウィンそのものについての報道も広く側面からの応援になった。行事の拡散をめぐっては大衆文化や商業の側面が過大評価されるが、その背景をさぐると、行事の受容者の側のプラグマティックな姿勢が見えてくるのが屢々である。子供の頃からアメリカでハロウィンを知っていたというあるパーティー客は、スイスでも数年前からはパンプキンだけでなくハロウィン用品を手に入れるのは少しも不自由なくっている、と言葉少なに話してくれた<sup>3</sup>。たしかに行事の歴史における〈根〉についてはメディアのなかで散々語られてきており、また寄与するものも欠けてはいないにせよ、ここでの関心はむしろ別の歴史である。すなわち、〈根〉よりも〈道〉<sup>ii</sup>、あるいはスイスでのハロウィン拡散の〈主な道筋〉を追跡しようと思う。

### カボチャを囲むダンス：農民の畑からイベントの穴をうめるスポットライトへ

ジャック・オ・ランタンは悪魔と契約をむすび、蹄鉄の鍛冶師として世界的に成功を取る代わりに魂を売り渡したとされる。これは、メディアによって広められたハロウィン・パンプキンをめぐる伝説の多彩なヴァリエーションの一つである。カボチャは、ハロウィンを飾る具体的な事物である。それは、スイスにおいて、ハロウィンのシンボリックな仕組みのなかで最も重要な要素となっただけでなく、スイスの国境を越えて拡大し成功をおさめつつある市場化構造のなかで文化的に作用能力の高い〈鍵野菜〉<sup>キイ</sup>にまで発展した。

モンスター的なまでのマーケティングへの道をたどった事例として、チューリッヒ市内から鉄道で半時間の距離にあるチューリッヒ高地のゼーグレーベン<sup>iii</sup>を挙げるができる。黒い樅の森に被われたアー谷を越えると、先には愛らしい形の丘の頂が見えるが、その向こうのなだらかな尾根に家々が点在している。小さな農村なのである。農業を営むユッカーさん一家は、北のプフェフィカー湖に向ってのどかな眺望が広がる村の北端に屋敷を構えている。ゼーグレーベンの年中行事は、ハロウィンが話題になる前にも、ファスナハトや幾つかのささやかな行事が行なわれていたが、訪れる人は僅かであった。村の仕来りのなかで育った若者たちは、この地方の小都市であるヴェッツィコーンやヒンヴィールその他の〈サンシャイン・パーティー〉に出かけていた。

そのなかに、ユッカー家の二人の息子、マルティーンとベアートもいた。二人は農業を営んでおり、長男のマルティーンは果樹を手懸けていた。二人とも、それ以外に商売の契

<sup>3</sup> René von Euw, *Tanz der Hexen und Vampire* (魔女と吸血鬼のダンス). In: Brückenbauer, Nr.44, 27. Oktober 1998, S.8.

約を結んでいた。カボチャを扱うようになったのは、幾分、偶然でもあった。1996年、彼らは菜園の隅にカボチャを植えた。そして自分たちの農場の直売所に並べたところ、たちまち数百キロが売れたのである。それに先立って、特に若者たちが立ち寄って、ハロウィン・パーティーのためのカボチャがあるかどうかを尋ねていたのである。ユッカー一家は、翌1997年には作付け面積を増やし、9月には自ら開催した「チューリッヒ州・第1回カボチャ展」に運び込んだ。ユッカー一家の顧客カードと地方メディアの宣伝の両方が効を奏して、展示会では8000人以上が来場し、感激した。そこでマルティーンとベアートは、カボチャの品種を増やすと共に、このテーマに力を入れることを決意した。

1998年には、すでに事前の反響も大きかったところから、100トン152品種が並べられた。もっとも、ハロウィン用品そのものに向いたカボチャは5トンに過ぎなかった。しかしカボチャ展にはメディアが予想を超えるほどの反応を見せ、それもあって15,000人が訪れた。隣町の小都市の「ピーチ・クラブ」がハロウィン・パーティーを、ティーンエイジャーと大人に分けて開催したところ、喜んで集まった人々は優に600人に達した。しかし、仮装装束ははちらほらという程度だった。カボチャ展はスイスのテレビ局DRSのワイド・ニュースで、「世界最大のパンプキン展」として取り上げられ、さらにワイド・ニュース企画室のイニシアティブで、近隣のキュスナハト市の〈小学校〉で開かれたハロウィン・パーティーと組み合わせられた。

翌年は、さらに規模が拡大し、カボチャは800トン250品種にのぼり、来場者は32万人という新記録になった。カボチャのピラミッドは世界記録としてギネスブックにまで載った。さらに世界最大の重さ440kgのカボチャがUSAから飛行機で運ばれたが、これは「世界パンプキン促進会」(World Pumpkin Confederation)の提供であった。「ユッカー・ファームアート」社(Firma "Jucker Farmart")が設立され、展示会にあたっては、広告代理店がプロの立場からマーケティングを手懸けるようになった。

ハロウィンに合わせた形のカボチャのスライス・セットと、飾り付けのための模様が採り入れられ、それによって物質面でのハロウィンの材料は幅をひろげた。スライス・セットは30,000個になったが、そのアイデアをユッカー社はアメリカから取り寄せた。ところが、アメリカのメーカーがヨーロッパの特許を失念していたため、ユッカー・ファームアートが押さえてしまった。隣の小都市で開催されることが恒例化していた「Sunshine-Party」も、1999年にはハロウィンを看板に掲げて6,000人を集め、その四分の一が仮装装束で参加した。パーティー企画のプロ<sup>4</sup>が担当し、特に金のかかる衣装の参加者には特典として仮面が渡された。パーティーには、もちろんメディアも関わった。地方メディア

<sup>4</sup> Mb-Productions: mbua.ch bzw. www.halloweenfestival.ch

だけでなく、スイス・ワイドニュースが報道し、またその番組では、ライン谷の魔法使いのニュースとの組み合わせで放映された。さらにナショナル・テレビの若者向け番組でも取り上げられた。カボチャ展も全世界に紹介され、中国からペルーにまで伝えられたとのことである。

村は当初は大層積極的であったが、交通の混乱が起きると共に不快感が広がり、1999年には交通規制が定められた。村へ入ることができるのは住民証明書を持つ場合に限られ、自家用車を遠慮してもらうために、スイス、ドイツ、オーストリアの100台の車を代わりに準備した。またスイス国鉄やローカル鉄道の強力を得て、公共交通による送迎手段を整えた。ユッカー・ファームアートはスイス各地のショッピング・スポットに小規模のカボチャ展を開催して、一大イベントを側面から支える方策をも立てた。

2000年は、これまたマーケットの規模拡大とプロフェッショナルなマーケティングに向けた新しい起点と言ってよかった。展示会は、二週続けて週末に開催された。第一週目はカボチャの車のヨーロッパ・チャンピオンのコンクールが行なわれ、第二週目には世界最大量のカボチャ・スープが調理された。子供用のカボチャの切り込みセットが導入されて、30,000セットが売れた。会場を訪れた人の数は40万人に上った。

## マーケット・モンスターとモンスター・マーケット

カボチャは、魂を失ったジャック・オ・ランタンのカンテラとして一緒に世界をさまよったとされるが、それが、マーケット・モンスターとモンスター・マーケットの契約においてシンボル性ゆたかな土台になったのは、疑いの無い事実である。会場には、カボチャのピラミッドやカボチャ・スープがあり、また世界記録になるような重いカボチャも用意された。それだけでなく、ユッカー・ファームアートは、〈ヨーロッパ市場で最もよく知られた100種類のトレード・マークの仲間入りをする体験型展示会マーク〉と自称している。そのマークが意味するのは、〈イベントを掲げるマーケティング戦略を囲まれた〉革新的で真面目で体験型のイメージであると言う<sup>5</sup>。

「ハロウィン・パック」には3種類のヴァリエーションが用意された。「ライト・パック」(会場での売り場面積：5-8m<sup>2</sup>)、「コンパクト・パック」(会場での売り場面積：10-12m<sup>2</sup>)、「プレゼンテーション用トップ・パック (開封不可)」(会場での売り場面積：15-20m<sup>2</sup>)である。これらはいずれも好みの組み立て式の厚紙箱と組み合わせることでき、さら

---

<sup>5</sup> 次のユッカー・ファームアートのビジネス・ドキュメントを参照、Betriebsdokumentation Jucker Farmart AG. Seegräben 2001, S.11.

## ヨーロッパ諸国のハロウィン (4)

に2ユーロから4ユーロの小さな台車に載せることもできた。この〈揃いで、コンパクトで、台車付き〉、それに加えて〈快適、アトラクティヴ、サクセス〉の売り文句は、ハロウィンの小物を扱うビジネスマンのハートにとらえ、やがて何千というヴァリエーションが工夫されることになった。カボチャを使った多彩な商品、カボチャ・オイル、カボチャの種、「パンプキンのすべて」を初めとするカボチャを話題にした本類も、そうした客には欠かせない。同様に、広報パンフレット、広告ガイド、写真入りの商品解説、組み立てのための手引、販売担当者のための教養案内、広告とPRのための写真資料、ディスプレイにいらしたチラシ、売り手の満足のために生産者が気配りに作ったラップに包んだ麦の塊である<sup>6</sup>。

これらの商品構造が、秋季のイベント提供者の多彩で細かな区分を組み入れたインテリア戦略を指し示しており、そこには目立ちはしないものの小売の影も忍びこんでいることは、疑えない。それに較べて疑いを向けて然るべきは、ラップに包んだ麦束とユーロ紙幣の台車のあいだにあって、シンボリックなエネルギーに向けた映像提示が成されたのかどうか、またどのような形態であったのかである。カボチャと、ハロウィンのあり得べき行事形成と結合という複合現象を貫流してはたらく〈装填〉は、体験パックのなかであまりにも標準化され、また特殊化され、〈仮面の文化〉というより〈行事として仮面をつけた経済〉のなかで二つの顔を見せるにいたった。

同じハロウィン・パックは、ヴァリエーションも含めて、10月末には多くの小売店だけでなく、スイス各地のホビー・建材のチェーン店などにも並べられる。ドイツの多くの地方にも供給され、新たな分野が出来上がりつつある。ベルリン、オーバーハウゼン地方、低地ライン地方などである。

スイス国内で生産をになっているのは、チューリッヒでは8人の農民だけだが、他の地方では合わせて100人を超えるであろう。ユッカー一家自身はもはやカボチャの生産には携わっていない。またベルリンのシュプレーヴァルト<sup>iv</sup>では、1500人近くがキュウリとカボチャの栽培を手懸け、またデュッセルドルフの2箇所の拠点では、800人が働いている。もっともその多数はポーランド人で、彼らの手で、カボチャは一つずつ収穫されるのである。〈ドイツでのハロウィンのためのカボチャの生産に他に誰かが入り込もうしてもだ……俺たちと一緒に仕事をするか、でなければカボチャが売れないかだ〉、とマルティーン・ユッカーは笑いながら大声で答えたものである<sup>7</sup>。

<sup>6</sup> 次のユッカー・ファームアートのパンフレットを参照, Firmenbroschüre Jucker Farmart AG: Erleben Sie den Herbst mit Kürbiss. Kürbis – Halloween – Erlebnispromotion. Seegräben 2001.

<sup>7</sup> 2001年4月10日に行なったMartin Juckerへのインタビューによる (Interview mit Martin Jucker, Geschäftsleitung Jucker GmbH. Mittwoch, 10 April 2001 in Seegräben, Kanton Zürich).

ルートヴィヒスブルクでは、ユッカー社の働きかけと共催で2000年に初めてパンプキン展示会がレクリエーション・パーク（これ自体は年中開いている）で開催されたが、やはり40万人という多数の入場者をつめた。当初懐疑的であった市長も譲歩し、個人的にも会場を訪れた。

ベルギー、オランダ、それにスカンジナビア諸国のパートナーもユッカー社に照会をもとめた。目下、動きがみられるのは、フランスである。フランスのガーデン・センター会社がユッカー社につながりをもとめ、現在では特別のパートナーとなっている。小売店だけでなく、ガーデン用品をあつかう店や、ヨーロッパ各地のレクリエーション・パークも、ユッカー社のパッケージを並べる上で理想的な場所となっている。商品の供給・販売のシステムには、数十年来国境を超えた展開を見せている「ヨーロッパ種苗センター」とも繋がっている。マルティーン・ユッカーの話では、この分野は年間を通じて種々のイベントを生命の糧としているところがあるが、11月はこれまで契約の端境期だったと言う。

「ユッカー・ファームアート社」でのハロウィン・パンプキンの生産は、1997年の50トンから2000年の5,000トンへの上昇した。ハロウィンに関係した商品の販売額は、3千万スイス・フランと見積もられている（因みに比較のために挙げると、玩具の年間販売額は毎年ほぼ6億5千万スイス・フランである）。ユッカー社だけでも、2000年には、800万スイス・フランであった。限定生産の「ハロウィン・スマート二輪馬車」も市場に投入され、45台が売れた。その内、15台は食料品関係者があつかい、30台はノン・フード・マーケットの扱いであった。マーケット・リサーチ研究所「IHA/GfM」は、ノンフード作物における（そう呼べるかどうかはともかく）非合理的なものへの志向を指摘している<sup>8</sup>。

スイス野菜栽培センターによれば、市場は、＜ユッカー・ファームアート＞のような生産者を二つ以上こなすほどの規模ではないと言う。カボチャは貯蔵のきく野菜であり、またインテリアにも使え、さらに植物油の原料にもなることから、ハロウィンにも健康にも活用することができる、と野菜の専門家は、カボチャが多面的な効用をもつことを謳いあげる<sup>9</sup>。

伝統的にカボチャは、農家の菜園の日陰の場所に適した植物であった。特に農家の女性たちには、カボチャは堆肥をなじませ、大きな葉が保水に役立ち、それ自体も有機肥料となることによって喜ばれてきた。さらに秋には、それぞれの農家が、形よく育ったカボチャ

<sup>8</sup> Andreas Schaffner, *Im Kinderzimmer wird's gruselig....* <子供部屋や恐怖でいっぱい：ハロウィンで雑貨は秋季の空白を埋められそう…… 論者によれば、今年（2000年）の雑貨の売り上げは3千万スイス・フランの売り上げ増になる見通しという>。In: Cash, 13. Oktober 2000, S.7.

<sup>9</sup> スイス連邦の委託組織である「スイス野菜栽培センター」（Schweizerische Zentralstelle für Gemüseanbau）のリューティ氏（Lüthy）とのインタビュー（22. April 2001）による。



#### ヨーロッパ諸国のハロウィン (4)

を菜園の壁の上に並べてデコレーションとしていた。そうした活用は、農業専門学校でも取り上げられ、農家の男女に受け継がれていた。しかし第二次世界大戦後始まった高効率の農業経営の地域では、そうした用途は消滅し、それと共にデコレーションとしても意味をもたなくなつて、農家からほとんど姿を消していった。例えば、1960-70年代には、ベルン近郊のフリブル地区では、カボチャは1キログラムがあるかないかという程度だった。1980年代末、農家の菜園での昔の様子が偲ばれるようになって、再びカボチャが植えられるようになった。しかし、それ以後も、地域の数少ない顧客や通りすがりの客のために、ささやかに並べられるだけになった。しかも農家から直接購入するしかないそうした状況は今日も続いている。スイスの多くの農家がカボチャを供給するために、大々的に並べたり、パンプキン祭りを催したり、しかも花で飾ったりするようになったのは、この5年ほどのことである。目下はそのブームがなお持続し、絶えず新しい品種の植え付けがなされては提供される。しかしリュウティ氏によれば、早晚、飽きが来て、そうした文化は消えるだろう。

その間に、オレンジ色の化け物の顔に仕立ててジャック・オ・ランタンに明かりをつけたパンプキンは、小物商や種苗センターやレストランの端境期をうずめるだけでなく、ヨーロッパ中で、ハロウィンがポピュラーになることに資するようになった。ユッカーのような企業営農家たちはイヴェントの企画者たることを自覚しているだけでなく、〈時宜にかなった行事文化〉<sup>10</sup>の育成者・管理者であるとの意識まで示している。プロテスタント教会がハロウィンを異教的なオカルトを煽るものとして非難したことをどう思うかとの質問に、ユッカー氏は、オカルト的な儀式が社会化することがないよう十分注意を払っており、ハロウィンは楽しい一日となることを目指していると回答した。また1998年には、インテリオ<sup>v</sup>が百貨店としては初めてハロウィン・インテリアのカタログを作成して市場に姿を現した。1998年にインテリオとユッカー・ファームアートが同時にスイスのテレビ・ニュースで取り上げられたのには、意識的に企画されたところがあった。両者がパートナーとして手を組んだのは、スイス全体の〈ハロウィンの中心〉になることを意図していたのである。事実、ユッカー・ファームアートのマーケティング主任は、自社の広報誌において〈ハロウィンについての我々の考え方をスイス全体に理解してもらいたいと願っている〉と語っている<sup>11</sup>。またリント&シュプリュンクリ社<sup>v</sup>の経営責任者エルンスト・タンナーも、チョコレート市場に新たな需要のテーマを活発化させるために、新しい祭り

<sup>10</sup> Martin Huber, *Techno-Geisterstunde im Industriegebiet...* 〈工業地域でのテクノ妖怪のひとつ：エーリックのABBホールでのハロウィン・フェスティバルでは優に15,000人が夜通しダンスに興じた。主催者は、大成功と語っている〉。In: Tages-Anzeiger, 30. Oktober 2000, S. 15.

<sup>11</sup> *Jucker Farmart News*: Ausgabe September 2000, S. 3.

行事の日取りを創り出す必要性を語っている。母の日とヴァレンタイン・デーは既に軌道に乗っている。目下、ハロウィンがテスト中だ、と言うのである<sup>12</sup>。

## 新しく、そして複合的？－行事管理の独占化とメディア操作

ハロウィンは、事実、複合的な現象である。なぜなら、この行事の本質的なシンボル構造は経済的に動機づけられ、また高度に独占的に運営されて普及をみているところにあり、その上、個別的な差異と主観的な価値づけ、さらに体験の質と意味づけの型に絶えず変化を促し、加えてスタンダードな形態の広まりと大衆文化的な再生産を続けているからである。それと同時に、メディアは、〈根〉の護り手を自認している。実際、ハロウィンが見るからにケルト神話と関連することや、本来ヨーロッパに根源をもつことに言及しない報道は皆無と言ってよいほどである<sup>13</sup>。

現代の儀式やシンボルを、〈根〉の側面に重点を置くのではなく、文化的混交の経過点と階梯として注目するなら、シンボリック・物質文化的な装飾の普及経路、行事の実際が部分的であれメディアを通じて受容され、さらにメディアによる解説や意味づけは、行事供給への集团的仕様を指し示しはするものの、その裏で進行する価値システムにはほとんど関係しない。価値づけは、諸個人あるいは小集団のなかで進展するのである。メディアも、儀礼としてのハロウィンがヨーロッパに起源を負うことを指摘しはするが、さりとてケルトの宗教を再建することはできず、解説においてそうした幻想をもっているとも思えない。

クリスマス、イースター、あるいは最近ではハロウィンもそうだが、これらをめぐっては常に同じ問いが立てられよう。これらすべては、祭事の起源的な意味となお関係があるのであろうか。純然たる営利への境界を疾うに越えているのではなかろうか。

---

<sup>12</sup> Sandra Escher, *Neue Ferertage erfinden....* <新しい祭りの日を創る：リント&シュプリュンクリ社の経営責任者エルンスト・タンナー（Lindt & Sprüngli/CEO und VR-Präsident Ernst Tanner）はクリスマス商戦が特別のものになると語り、また新しい板チョコ・シリーズにも触れながら、アメリカでのビジネスも好調であることを紹介した>。In: Handels-Zeitung, Nr.50, 15. Dezember 1999, S.25-26.

<sup>13</sup> 例えば次を参照, Irene Widmer, *Halloween – eine europäische Erfindung.....* <ハロウィンはヨーロッパで創られた：ハロウィンの起源はケルト人の行事であり、したがってそのルーツはヨーロッパにある、2300年前にヨーロッパではこの催しが行なわれていたわけだ>。In: Tages-Anzeiger, 29. Oktober 1999, S.16.

もしそうなら、深層の意味を尋ねるのは二次的なことがらであろう。前面に立つのは、少なくともハロウィンについては、華やかな賑わいである。そのために、パンプキンを呼号した機縁は打ってつけである。かくしてモットーがあたえられるや、生きている者が恐怖や魔女や吸血鬼や魔法を喜ぶわけだが、それが人間の魂の奥深く礎を下ろしていることは、ハリー・ポッターがよく示してもいる<sup>14</sup>。

## 世俗化あるいは代替宗教性？

しかしハロウィン・カルトがどの程度までパーティー参加者やパンプキン消費者の心理の奥深くひそんでいるかは、数量的な調査を広く行なう以外には計りようがない。パーティーやメディアの報道を筆者たちが自ら観察したところから言えば、そこに支配的なのは遊びの構成素である。仮令、背後に、日常のなかでの抑圧による化け物の世界や死のテーマとの関わりへの欲求（少なくともそうした）が <ささやかな> 超越の意味で共振しているとしても、基本は遊びである。チューリッヒでのパーティーに参加した一人の女性にとっても、ハロウィンは何よりも楽しみだったのである。

アストリッドは、同僚3人と共に会場の「マジート」へ現れるにあたって、蜘蛛女に変装した。しかし彼女は、ハロウィンについては、<思い切り怖いものの言い方をし、怖い格好をしてもよい>という以上のことは知らなかった。商人のペーター（36歳）も死神のコスチュームを着けた製造業従業員ニコラ（36歳）もそれ以上の知識をもっていない<sup>15</sup>。

ハロウィンがコマーシャルリズムの落とし子であり、それ以上ではないことでは、大方が一致している。そこで、ハロウィンは程なく下火になるのかどうか、との問いも立てられる。「妖怪ではなく小悪魔。決定的な趨勢か、それともマーケティングのトリックか？ ど

---

<sup>14</sup> Christina Hubbeling, *Von der Street Parade zu Halloween. Tanz und Maskeraden im Zeichen des keltischen Kults* (ストリート・パレードからハロウィンへ/ケトルとの信奉の旗印にダンスと仮面). In: *Neue Zürcher Zeitung*, 30. Oktober 2000, Nr.253, S.41.

<sup>15</sup> Annelies Friedli, *Gruselige Halloween-Nacht. Extradinks, Sondermenüs, schwarze Dekoration: Wer in der Zürcher Gastroszene etwas auf sich hält, setzte dieses Wochenende auf Halloween* (身の毛もよだつハロウィンの夜: 特別ドリンク, 特別メニュー, 暗黒デコレーション: チューリッヒのレストランに何かを期待する人は今度の週末をハロウィンに賭けては). In: *Tages-Anzeiger*, 1. November 1999, S.19.

んなに躍起になっても、スイスではハロウィンが盛んにならない<sup>16</sup>、これはある記事の見出しだが、ハロウィンの動きをめぐってその女性記者が示した見解に我が意を得たりとばかり賛同する人も多いことであろう。

ハロウィンに対する教会の反撥は、少なくともプロテスタント教会については散見される。スイス・プロテスタント教会連合<sup>vii</sup>は、「キリスト者にハロウィンは要らない」と題した呼びかけを企業や学校に向けて行ない、ハロウィンに商品出荷や祭り行事の挙行を見合わせることをもとめた。それは、グループによってはパーティーが暴力的あるいは悪魔的なイベントになることがあり、心身の危険も憂慮されるからである、と言う<sup>17</sup>。

そうした事件が個別的には起きているものの、ハロウィンは代替宗教としてオカルト・異教性が活力を得る場所でもないように思われる。それゆえ、ヴィンタートゥアーの牧師やプロテスタントの教団幹部たちも、ハロウィンには危惧を抱いていない。彼らによれば、例えばネオ魔女運動を助長しているものとしては、むしろヴァルプルギスの夜<sup>viii</sup>の方が憂慮すべきものとされる<sup>18</sup>。2001年4月30日付けの日刊紙『ターゲス・アンツァイガー』は、大見出しを付けて、一人の魔女へのインタビュー記事を書いた。その魔女は、彼女の特別の能力について語り、バジリコ<sup>ix</sup>は金運をもたらし、さらに彼女は生まれながらの魔女であるなどと話している。さらにムツェレン地区<sup>x</sup>には、既に数百人の魔女が存在するが、その多くは、自分が魔女であることを明らかにしたがるらないとも言う。また「魔女の六鐘祭」<sup>xi</sup>の見出しの囲み記事には、ヴァルプルギスの夜がケルト起源であるとの説明がなされている<sup>19</sup>。そこに挙げられたインターネットのサイトには、ヴァルプルギスの夜については2つの公開の祭りへの案内がなされている。グルフティ・カルチャー<sup>xii</sup>も、その音楽「ゴシック・ウェーヴ」<sup>xiii</sup>が1980年代にブームを現出した後はほとんど意味をもたなくなりましたが、それでも独自の溜り場を維持して、ヴァルプルギスの夜の祭りを続けている。ゴシック・カルチャーは独自のスタイルへの刺激を、あの世との出会いを内容とする

<sup>16</sup> Susi Zihler, *Statt Spuk nur ein kleines Spüklein. Ultimativer Trend oder nur ein Marketing-Trick? Trotz aller Bemühungen wird Halloween in der Schweiz nicht richtig gefeiert*. In: Tages-Anzeiger, 27. Oktober 1998, S.79.

<sup>17</sup> Marcel Nusskern, *Völlig aus der Luft gegriffen? Halloween:..... <ハロウィンって本当は嘘っばち? 満杯になって溢れ出して、ヨーロッパでお客を探している>*. In: Aargauer Zeitung, 27. Oktober 2000, S.39.

<sup>18</sup> Pfarrer Georg Schmid, *Winterthur*: 参照, [www.winti.ch/wiwo/archiv/1999/43/halloween.html](http://www.winti.ch/wiwo/archiv/1999/43/halloween.html).

<sup>19</sup> Hélène Arnet, *Wicca, die Hexe vom Mutschellen..... <ヴィッカはムツェレンから来た魔女: 今日魔女の大きな祭り, ヴァルプルギスの夜, ヴィッカも一緒に踊る, 彼女はルードルフシュテッテンに住んでいる彼女は, 自分が魔女として生れてたと信じている.>*. In: Tages-Anzeiger, 30. April 2001, S.18.

不気味な文学作品や映画から得ている。ドラキュラ、ヴァンパイア小説、幽霊譚は、愛好される読み物である。その部屋々は、髑髏や黒蠟燭で飾られ、衣装や髪は黒く柵引いていなければならない、眼は同じく黒く縁取られ、銀の装身具は宗教的・神秘的なモチーフを盛り込み、さらに余暇にはテーブル心霊<sup>xiv</sup> や降神術<sup>xv</sup>の集会<sup>xvi</sup> がなされる。ゴシック・ウェーブの定礎者世代とは対立的に、ある程度大きな諸都市ではアクティブな今日のリヴァイヴァル・シーンのメンバーは、ただ週末だけ現れる。黒魔術<sup>xvii</sup>との区別を意識してはいるものの、〈黒色への信仰〉が〈擬似投資〉(上べだけの参加)によって置き換えられ、多数者は黒い信奉を単なる装飾と見るに過ぎない、と代表者たちは嘆く<sup>20</sup>。

ハロウィンに際して信奉めいた行動が、ともかく行なわれるとすれば、それはハロウィンとは関係なくすでにオカルト的なテーマを定めているグループにおいてであろうが、それにしても魔女と地下音楽のグループのあいだでは、それは稀である。

## 行事管理の一元化か、それとも多彩な現実か？

経済モチーフによる体験戦術とそれによる行事管理の独占的一元化、そしてそれに支えられた全国的あるいは地方的なメディアの役割、これらはスイスでのハロウィンのポピュラー化における平準化を指し示している。それゆえ、次のような問いを立てる必要がある。そうであるなら、ここではハロウィンのなかにもあまりに多くを採集しすぎているのではなかろうか、逆に、独占的に管理され市場戦術によって操作された流行のテーマとして簡単に評価してしまつてよいのかどうか、である。

需要の幅の広さと多彩な分野を見るための拡張された道としては、ヴァージョンとそのポピュラーな現実における多様性を明るみに出すことが挙げられよう。実際、その現実は、受けとめ方の分岐と日常のなかでそれが機能をもつこと示唆している。

その点では、スイスのなかでも地域間の差異が大きいことに先ず注目をしたい。スイス西部ではフランスの影響を受けたためハロウィンは早く出現し、それに較べてドイツ系スイス地域ではずっと遅く、例えばテッシン<sup>xviii</sup>ではその知られ方はなお希薄と言ってよい。この12年間を見ると、ハロウィンは西から東へ徐々に広がってきた。それゆえ、西に位置するベルンに較べて、ザンクト・ガレン<sup>xix</sup>では今日でもハロウィンはほとんど見受けないのである。

広がり方についても、スイスの場合、必ずしも都会が発信地というわけではない。むしろ

<sup>20</sup> Udo Theiss/Dani Winter, *Night of the Living Dead. Hexen, Gruftis und Abschaum* (死霊の夜：オジサンたちと滓 [訳注] “Grufti” は70年代の前衛への古臭いとするときの呼称, “Abschaum” はパウロの第一コリント書にある人間の泡 or 滓). In: ERNST, 24. April 1996, S.6-7.

ろ小都市や町村体が起点であることが多く、それはまた社会的なネットワークの形成や現にローカルな次元で行なわれている文化形態の特質を見ると、そこに地域的な影響がはたらいっていることが推測される。事実、インターネットを通じた無数の情報では、地域体のなかに現存する諸々の機能的なグループがハロウィンに向けてまとまるという動向が窺える。小さなディスコがハロウィンを彼らの年間のプログラムに取り入れ、さらに前年のパーティーの魅力的な写真をインターネットに載せたりするのである。協会組織、スポーツクラブ、小学校のときの嘗てのクラスメートなどが、それぞれの催し物の固定した部分としてハロウィンを取り入れたりもしている。ローカルな父兄会が、ファスナハトやハロウィンやストリート・パレードの際のメーキャップ同好会を作る例も見られた。シルバー・クラブでも、血圧やマサイ・ウォーキング術やトレッキングと同じく、ハロウィンを掲げてまとまっていた事例がある。

スイスでのハロウィン受容を見ると、その分散の中心点は必ずしも都会的な性格ではない。スイスでは80年代以来、農家で直接購入する直売方式が盛んになったが、この数年を見ると、それも参加者を引きよせる磁石の役割を果たしてきた。季節の頂点に沿って催される幾つかのチャンスは、農産物の生産の現場において魅力的な形をとった高度に美的な見栄えにまで発展した。季節の頂点、すなわち、葡萄の摘み取り、秋祭り、8月1日の農家での昼食会<sup>21</sup>が、1990年代初めから、時とともに多くの訪問者を集めるようになった。因みに8月1日の昼食会を企画してきたある農家の夫妻によれば、訪問者の大半はチューリッヒやヴィンタートゥアなどの近隣の都会からやって来る。1999年の場合、スイス全体では500戸の農家に200,000人が8月1日の昼食を味わうために訪れた。のみならず、増大する需要に応えるために、さらに100戸の農家が今後加わるとされている<sup>21</sup>。カボチャ・ブームとユッカー一家も、その初期の数年には、デコレーションと美食の両面から都会と農家の交流が高まる趨勢から利益を得たのだった。昼食ビュッフェや農家酒場や田舎屋敷風の店舗には、素敵なカボチャだけでなく、魔女の大きな箒や飛んでいる小さな魔女があしらわれている。そうしたデコレーションの多くは、その近在で作られて、売られるのである。因みに、チューリッヒ州<sup>カントン</sup>の秋祭りには人間が扮した <リージトーベルの魔女たち><sup>22</sup>が出て、子供たちを怖がらせ、恐怖の金切り声を立てさせる<sup>22</sup>。

内容の面で何が優勢であるかについても特定の傾向があきらかになる。ハロウィンが広

<sup>21</sup> Urs Bühler, *Die Landschaft in der Nase – im Gaumen der Most. 1. August-Brunch auf Bauernhöfen lockt viele Besucher an* (鼻に田舎の空気、口に果実酒：大勢の人を誘う8月1日の昼食会)。In: Neue Zürcher Zeitung, 2. August 1999, S.29.

<sup>22</sup> Hélène Arnet, *Zum Wohl des grössten Rebdorfes* (最大の葡萄村に乾杯)。In: Tages-Anzeiger, 9. Oktober 2000, S.19.

#### ヨーロッパ諸国のハロウィン (4)

まり始めた頃には、公爵、公爵夫人、魔女、妖怪、骸骨のモチーフが好まれたが、ほぼ4年前にはホラー映画『スクリーム』<sup>23</sup>の仮面が現れ、それ以来、恐怖をそそり、吐き気を誘い、血に飢えた種類のテーマが一般的に定着しつつある<sup>23</sup>。同様の展開を見せるフランスとUSAの影響の下、西から東へと、ドラキュラやゾンビや死体のモチーフが広まってきている。注目すべきは、子供たちが〈おぞましい〉扮装を好むことである。つまり、丈の高い扮装をつけたり、竹馬に乗ったりすれば、大人たちを怖がらせることができるというわけである。学校でのジルヴェスター(大晦日)では、学校側でも家庭の側でも無秩序を規制する度合いが高まっているが、それだけに青少年の反抗儀礼のヴァリエーションがここで頭をもたげているかのようである。

最後に、ハロウィンは都会の中心部において受容する諸分野とぶつかった。そこにまたそれはそれで特殊な脈絡が存するが、その場所で、ハロウィンは特定の機能を満たす。因みに近年、ヴァルブルギスの夜が盛んになっており、魔女が現われるだけでなく、また賑わいが繰り広げられる<sup>24</sup>。グルフティ・カルチャーやヴァンパイア・ファン・クラブもある。これらが、また年間推移に関わる行事形成を補充する上で、ハロウィンにおいて親近なシンボル構造を見出している。スイスの幾つもの都会においてテクノ系の催しを中心に繰り広げられるパーティー文化は、ハロウィンという新しい波の好意的な受け手である。そのあり方を言い表すには、“self-styling”(自分なりのスタイル作り)、“bodywork”(身体表現)、“bodyworship”(身体崇拜)、“masked culture”(仮面文化)、“Lifestyle”の多岐傾向、“Fun- und Eventkultur”(ファン・イベント文化)をここに含めてもよいであろう。これらは、日常を包括する余暇文化とその変化に富んだ姿勢という単純な概念のもとでも取り上げることができなくもない。

さらに注目すべきこととして、今では、年間を通して“masked culture”の諸々のテーマが提供されることである。仮面・パーティー用品ショップがこれに関わっており、ストリート・パレードやハロウィンに先立つ時期では、毎年、ファスナハトにおいて売り上げは最高を記録してきた。しかし最近では、一年を通して仮面の愛好家の来店を見るようになってきている。これはこれで、広い意味での行事カレンダーの様相を示唆していよう。年間の推移のなかで民俗行事の性格にある山顛のほとんどが伝統的な意味連関と宗教性を帯びた解説モデルとしては意義を失っている現在、幾つかの山頂によって区切られ集团的に担

<sup>23</sup> スイス西部とドイツ系東部の境界に位置するあるコスチューム店に2000年5月1日に電話で問い合わせたところ、1999年のハロウィンの売り上げは、前年の20倍であったとのことである。

<sup>24</sup> 今年も既に何度も、私(=本稿の共同筆者ガブリエラ・ムーリ)に対して、種々の方面から、また公のルートを通じて、ヴァルブルギスの夜への懇ろな誘いが伝えられた。もちろん〈本物の魔女〉からではないが。

われるものとしての一年の推移が、(メディアの情報供給の力強い下支えを得、また対立する項目の相互依存もあって) 増幅して自己を主張しているように思われる。都会での刷新的な小場面や部分文化は、現代の年間カレンダーの新しい〈できごとの構造〉が形作られる上で、イノベーションとして表現ゆたかな刺激となる。それゆえ、協会組織、また町内などでの余暇形成の現場でもある既存の地域的ないしはローカルな機能的集団が、そうしたイノベーションを喜んで取り上げ、担い手にもなっている。

ハロウィンへの公的な関与、またその他にもストリート・パレードのようなイベントの実際を見ると、まるで最上級志向の<sup>パラダイグメン</sup>一覧表の観がある。パンプキンの数は増える一方であり、観客数もとめどなく増加する。〈最大のカボチャ〉が喜ばれ特筆される。総じて、お祭り気分が前面に出るのである。これに対して、スイスで広まっている家族どうしの付き合いや友人仲間のあいだでのプライベートなパーティーは、他の主導的なモチーフによって担われる。基本構造としてのドラマ性は他の種類のパーティーの成り行きに従ってはいるが、そこでは黒とオレンジの色彩、さらにカボチャそのものが中心的な役割を果たす。デコレーションの要素として、パンプキン仮面のための切り込みを競う人気コンクールの構成部分として、またスープや〈ニョッキ〉<sup>xxii</sup> や板クッキー<sup>xxiii</sup> や菓子やシャーベットになる美食的な特殊な食材として、カボチャの多彩な活用が〈オレンジの糸〉となってハロウィンの賑わいを貫いている。

最後に、ハロウィンとの親近性を自覚しつつも、この新しい現象とは一線を画そうとしている文化的な催しがある。

ふるさとの慣わしがハロウィンに抵抗している。今年もまた、十一月の小暗い夕べ、各地でカブラの提灯行列が光と喜びを携えて歩む。ゾイツァッハでは、500人を超える子供たちが、星の行列に参加した。<sup>25</sup>

毎度のように注目され、取り上げられることだが、スイスでは〈カブラの提灯行列〉<sup>xxiv</sup> はケルトと光の習俗の名残であり、ハロウィンの幽霊はそこでも見ることができると言うのである。

ケルトのハロウィン祭りの幽霊、それは長いあいだアメリカ人だけが大切にしてきたが、今やふたたび旧大陸をとらえている。平和なカブラの提灯行列にも、その影が差

<sup>25</sup> Susi Sasso, *Heimisches Brauchtum trotz Halloween.....* In: Der Landbote, 8. November 2000, S.25.



## ヨーロッパ諸国のハロウィン (4)

し始めた。たとえば7歳のイーヴェス君は、土曜にヴィープキンゲンを歩むとき、割り貫いたカブラではなく、ハロウィンのカボチャを手に行っている。……これに対してニコラス坊や(6歳)は、行列のなかを歩むのに、古い習俗に沿っている。携えるカブラは、太陽と月と星、それに作り手の名前で飾られている。これによって、ニコラス坊やは、圧倒的な多数派に与したわけだ。なぜなら、仮令、100個のカブラのなかに2、3個のカボチャが混じるだけでも、カブラの提灯行列のハロウィン化を云々する誘惑がはたらくからだ。<sup>26</sup>

これを書いている女性は、また新しい行事の担い手たちを元気づけるのが、カボチャのスープではなく、シロップとビール粥であることを報告しながら、ほっとしたような気分になっている。

望むらくは、ハロウィンの経路と機能には、抵抗や特殊性が払拭されることなく、またヨーロッパという台車に積み込まれたマーケット商品が、行事の空に見渡すかぎりのモンスター灯火に至る道程への(不可避であれ)入り口の一つにとどまらんことを。

### [訳注]

- i p.135 (S.260) 映画『E.T.』: アメリカ「ユニヴァーサル映画」社が製作し1982年に公開されたSF映画。監督はスピルバーグ (Steven Spielberg), タイトルのE.T.は“The Extra Terrestrial”の略語とされ, extra (外の), terra (地球), stria < stella (星) を組み合わせて<地球外生命体>を意味するとされる。筋は、母と兄・妹と暮らす少年エリオット (俳優: ヘンリー・トーマス) が地球に取り残された異星人を見つけE.T.と名づけて、妹とともに保護し、大人目から隠しながら、ふるさとの星へ返してやろうとする。映画にはハロウィンの場面が取り入れられている。
- ii p.136 (S.261) <根> (Wurzeln) よりも<道> (Wegen): ドイツ語で表記されているが、ジェームズ・クリフォード (James Clifford) の“roots”と“routes”を対比させる視点として、ここで訳出しているハロウィンの研究でも、編者のコルフをはじめ数人が言及している。
- iii p.136 (S.261) ゼーグレーベン他: ここで言及されるチューリッヒ近郊の地名の原語表記を次に挙げる。ゼーグレーベン (Seegräben), アー谷 (Aathal), プフェフィカー湖 (Pfäffikersee), ヴェッツィイコーン (Wetzikon), ヒンヴィール (Hinwil)。
- iv p.139 (S.264) ベルリン郊外シュプレーヴァルト (Spreewald bei Berlin): シュプレー川はエルベ川の支流で、ベルリンを貫流している。その南南東に広がるのがシュプレーの森で、ベルリンに近いところは約40キロメートルの距離である。なお近年では、ベルリンから約100kmに位置する区域が、

---

<sup>26</sup> Paula Biason, *Darunter ein paar Kürbisse* (二三個のカボチャが混じると)。In: *Tages-Anzeiger*, 8. November 1999, S.17.

氷河期に形成された自然環境の継続も含む多様な自然条件の故に1991年にユネスコの“biosphere reserve”に指定された。一帯では、農業にも比重がおかれている。

- v p.141 (S.266) インテリオ (Interio)：ウィーンに本店を持つオーストリアの家具生活用品を中心とした百貨店のチェーン店。
- vi p.141 (S.266) リント&シュプリュンクリ社 (Lindt & Sprüngli)：1845年にスイスのチューリッヒの旧市街にDavid Sprüngliと息子Rudolfが創業した菓子店で、チョコレートを扱って成長した。1899年にベルンのチョコレート工場経営者ロドルフェ・リント (Rodolphe Lindt) と組んで大発展し、世界有数のチョコレート会社となっている。日本では「リント」と表記されるようである。
- vii p.144 (S.268) スイス・プロテスタント教会連合 (SEA)：正式名称はSchweizerische Evangelische Allilanz。
- viii p.144 (S.271) ヴァルブルギスの夜 (Walpurgisnacht)：聖女ヴァルブルガ (hl. Walburga) の死亡の日とされる5月1日の前夜の4月30日の夜に魔物たちが中部ドイツのブロッケン山 (Brocken) に集まるとの伝承がある。ヴァルブルガは遺体が安置されているバイエルンのアイヒシュテット司教区に因んだ伝説であり、必ずしも一般的ではなかったが、ゲーテが『ファウスト』第一部で描いたことによって親しまれるようになった。今日では種々のカルト集団がこれを特別視し、一部では迷信化の風潮も見られる。
- ix p.144 (S.268) バジリコ (Basilikum)：インド・熱帯アジアで産する香辛料，英語のバジル (Basil)。古くから知られ、またギリシア語で王を意味する“basileus”，“basilikos”の縁語であることから、教会儀礼では十字架降下 (9月14日) の際に主の枕あるいは褥として十字架の下に敷く。種々の薬効があり、教会儀礼でも用いるため、逆に魔女による濫用の伝説も生じた。
- x p.144 (S.268) ムツチェレン (Region Mutschellen)：ムツチェレン峠 (標高551m) として知られる。チューリッヒから西へ延びる街道の要所で、峠を越えたところに位置する今日のルードルフシュテッテン=フリードリスベルク町 (Gemeinde Rudolfstetten-Friedlisberg) はチューリッヒ州の西に隣接するアールガウ州 (Kanton Aargau) の北辺にあたる。
- xi p.144 (S.268) 六鐘祭 (Sechseläuten)：チューリッヒの春祭りで、4月第3月曜に開催される。名称は、元は春分の日の午後6時に鐘を鳴らしたことに因む。“Böög”と呼ばれる雪ダルマをを引き回して最後にチューリッヒ湖の傍の広場で火刑にする。午後3時から種々の職団による騎馬による巡回がおこなわれ、最後に火刑になる雪ダルマの周りをギャロップで3度めぐり。午後6時の鐘と共に火がつけられる。騎馬によって死体をめぐることなどが、古代ギリシアの葬礼に遡るなどの行過ぎた解釈もまねいてきた。有名な祭りであり、観光客も多い。
- xii p.144 (S.268) グルフティ・カルチャー (Gruftkultur)：1980年代の <ポスト・パンク> (Post-Punk) すなわち <ウエーブ運動> を始めた世代について特にドイツ語圏で使われる言い方。ただし、次の1990年代初めの世代から、前代の風潮をマイナス・イメージをこめて呼んだ言い方でもある。“Grufti”は“Gruft” (墓穴・地下の墓所・霊廟) を語感として背景にしており、意味するところは、日常の刷新から目を逸らす旧世代、<古い人間> (英語：old foglery 時代遅れの物・頭の古い頑固者) とされる。しかし、暗黒のイメージへの親近感から、その世代は必ずしも反撥せずに却って自称することがある。
- xiii p.144 (S.268) ゴシック・ウェーブ (Gothic Wave)：グルフティ・カルチャー世代のロックを中心とした音楽で、1980年代の前衛であった。
- xiv p.145 (S.268) テーブル心霊 (Tischrücken)：語義は机が動くことで、質問に対する机の動きによって解答を読み取る心霊現象・心霊術。

## ヨーロッパ諸国のハロウィン (4)

- xv p.145 (S.268) **降神術の集会** (Séance, [pl.]-n) : フランス語の “seoir” に由来し、会合・集会・会議が原義であるが、降神術の集会の意味でもちいられる。
- xvi p.145 **黒魔術** (schwarze Magie) : 他人を呪ったり災厄を喜ぶなどの悪意ある呪的な行為を指す一般的な語と読めばよいであろう。なお黒魔術の語源はギリシア語の “nekros” (死者) と “manteia” (予言) の合成語で交霊術など意味したが、ラテン語化した “necromantie” が類音から “niger” (黒い) と “mantia” → “magia” と俗解されて黒魔術の語が生まれ、またそこから対比的に幸運を呼びよせる＜白魔術＞の概念も派生した。
- xvii p.145 (S.269) **テッシン** (Tessin) : 中部スイスの町
- xviii p.145 (S.269) **ザンクト・ガレン** (St. Gallen) : チューリッヒの東に隣接する州で、また同名の都市は古くからの修道院の所在地として知られている。
- xix p.146 (S.270) **8月1日の農家での昼食会** (1. August-Brunchs auf Bauernhöfen) : 1990年頃から盛んになった都会人による農村への回帰への一つの形態。期日は6月から9月まで区々であるが、8月1日は一般的な節目の一つ。今日では、ドイツ、オーストリア、スイスの各地の農村で組合や地元のホテルがさまざまな地元料理を用意して一日体験の勧誘を繰り返しており、インターネットでの宣伝も盛んである。“Brunch” は遅い朝食を指す語。
- xx p.146 (S.270) <**リージトobelの魔女たち**> (Risitobel-Hexen) : 1989年のヴァルプルギスの夜(4月30日) にチューリッヒ湖北東岸のシュテーファ町 (Stäfa) 上方リージトobel峠に20人の魔女が現れたとの噂が立ち、以後もさまざまな機縁に現れてシュテーファの町へ降りるとされる。町ではその評判を観光振興にも活用している。
- xxi p.147 (S.270) **ホラー映画『スクリーム』** (Scream) : 語義は英語で悲鳴を指す。1996年に作られたアメリカ映画。監督ウェス・クレイヴン (Wes Craven), 脚本ケヴィン・ウィリアムソン (Kevin Williamson)。筋書きは、カリフォルニア州の田舎町で、女子高校生ケイシーがビデオを見てると電話がかかり、その指示で外を見ると、恋人スティーヴが縛られ、やがて惨殺される。逃げようとする彼女の前に犯人が姿を現し、両親が帰宅したときには、彼女も殺されたばかりだった。以後、3作まで制作されている。
- xxii p.148 (S.272) <**ニョッキ**> (Gnocchi) : 小麦粉にジャガイモや粟の粉などを加えて練ったものを板状あるいは団子にして塩茹でし、ケチャップ、チーズ、ほうれん草など添える。素材はパスタに近い。ドイツ語では “Nocken”, “Nockerl” で、オーストリアでは一般的な食物である。
- xxiii p.148 (S.272) **板クッキー** (Wähe, [pl]-n) : スイスの平たいクッキーの一種で、塩味あるいは甘みのあるものを載せる。
- xxiv p.148 (S.272) <**カブラの提灯行列**> (Räbelielchtumzüge) : カブラと訳した “Räbe(n)” は飼料用甜菜 (ビート Futterrüben) のスイス方言。ビートは年間の畑作物の最後に得ることになるため、その収穫時期の節目であり、冬の到来でもあるマルティーニ (Martini 11月11日) を基準に収穫感謝の意味をもつ行列行事が行なわれてきた。特にチューリッヒ地方はそれが残ってきた地域である。代表的な事例として、チューリッヒ湖畔リヒターズヴィル村 (Richterswil am Zürchersee) の場合、その行事は “Räbechilbi” と呼ばれ、今日では11月の第2土曜が日取りであるが、ハロウィンによって刺激されたこともあって、2000年には、世界最大のビート提灯行列が企画され、ギネスブックに記載された。また同じくチューリッヒ市域の一角、チューリッヒ=アルビスリーデン (Zürich-Albisrieden) は、2008年の催しが第46回に当たるとして町が広報を行っており、Websiteには2002年から毎年の行事の写真を載せている。

## ハロウィン彗星<sup>1</sup>

ハインツ・シリング (フランフルト・アム・メイン)

[原タイトル] Heinz Schilling (Frankfurt am Main), *Komet Halloween*

### 事例1：フランケンシュタイン城砦でのハロウィン

ブライアン・ヒルは、ドイツのまんなかでのアメリカ人のふるさと祭りを思い出していた。それは1975年に遡る。ダルムシュタットのUSコミュニティは、その時はじめてハロウィン・パーティーに招待されたのだった。ホスト側は500人分を用意していたが、実際にはその10倍に及ぶ5000人がダッジとビュイク<sup>ii</sup>に乗ってやってきて、軍隊の緑色のナンバープレートが会場の界隈に延々と並んだ。そしてフランケンシュタインの城砦跡<sup>iii</sup>へ足を運んだのである。それから15年が経過すると、ハロウィンに参加してフランケンシュタインへ上る人々は、9万人以上を数えるようになった。その4分の3はヨーロッパ全域からやって来たアメリカ人だった。しかしその後、祭りは萎縮していった。

ブライアン・ヒルのイニシアティヴは、故国を遠く離れたアメリカ人たちのノスタルジーに、情動の捌口を供給した。このできごとを分析するなら、クロード・レヴィ=ストロースの意味での〈混交的な解決〉であったと推測できよう<sup>1</sup>。すなわちハロウィンとフランケンシュタインの出会いである。それは、アメリカ文化の3つの大きな記憶が結びついていることを意味している。ハロウィンは、スリルにも拘らず（あるいはそれ故に）子供の頃と家庭のシグナルである。先ず貯蔵庫としての神話集合から選ぶと—これは‘e pluribus unum’（多くのものから一つをとる）ことに他ならないが—ケルト=アイルランド・ルーツが病因学的な知識として浮上する。二つ目はアングロサクソンの理念伝統としてのフランケンシュタインである。1818年に刊行されたメアリー・シェリーの小説で登場したフランケンシュタインは、特に1931年の映画化によってフランケンシュタインの名前がモンスターの呼び名と取り違えられる変化を経由し<sup>iv</sup>、さらにボリス・カーロフ<sup>v</sup>がその

---

\* 原文は区分されていないが、訳出に際して小見出しをつけて読み易くした。

<sup>1</sup> Claude Lévi Straus; Der hingerichtete Weihnachtsmann. In: Der Komet. Almanach der Anderern Bibliothek auf das Jahr 1991. Frankfurt am Main 1991, S.162–190. here S.172. [Le Père Noël supplicié: In: Les Temps modernes 77 (1951/1952), p.1571–1590].

体現者として人々の頭に叩き込まれてしまった。混交的な構成素の三つ目は、そのロケーションである。満月の夜に浮かび上がる城砦の廃墟、それはドイツ・ロマン派のシルエットであり、ハリウッドが備蓄しているゴシックものにぴったりである。その上、ハイデルベルクも近い<sup>vi</sup>。

1994年、アメリカ軍は兵舎を空にしてドイツからほぼ撤収した。駐留軍の居住地が町の住民のものとなったのと並行して、フランケンシュタイン山上のハロウィンもドイツ人が中心になったが、同時にヨーロッパ全域に飛び火するアメリカ的なハロウィンの波をかぶってインターナショナルな性格として正当化を得ることになった。

そしてフランケンシュタイン山上におけるハロウィンの今日である。コマーシャルリズムによって徹底的に組織されたイベントが、3日間の週末が4週続いて企画される。参加者の人数は毎夜2000人に制限され、シャトルバスで運ばれる。8月にはチケットの販売が始まり、売上高は50万マルクに達する。主催者の広告には次のようなタイトルが踊っている。「セックスとスリルがフランケンシュタインと出会う／フランケン山上の恐怖と娯楽と緊張／＜怪物のホーム・タウン＞でのハロウィン・フェスティバル」。蓋し、27マルクの入場チケットはイキーノグラフィエ (Ikinographie)<sup>vii</sup>を何一つ見逃していない<sup>2</sup>。

夜のフランケンシュタイン山。怪物の城としてブランド化した廃墟、ハイカーたちの人気スポット、これはプログラムにとっては得難い専売品である。入り口には民衆祭の例に漏れず物売り屋台やヘンナ染め刺青のスタンド<sup>viii</sup>がずらりとならんでいる。ただし、カボ

---

<sup>2</sup> 「フランケンシュタイン城跡ハロウィン・フェスティバル2000」(“Frankenstein-Halloween-Festival 2000”)のパンフレットには次の案内が記されている。<咆哮する狼人間、血に飢えたヴァンパイア、誘惑する魔女—フランケンシュタイン城でのハロウィン・フェスティバル2000は、恐怖のスペクタクルと恐ろしい者たちがぞくぞくと登場し、今回もハロウィン・ファンへの最高の集まりです。これぞ、ヨーロッパ最大で最も有名なハロウィン・イベント。フランケンシュタイン砦の上のハロウィン—恐怖の仲間たちがあつまる幽霊の城。不気味な背景画からモンスターが抜け出して恐怖をもとめる御入場の皆様に襲いかかり、夜のゲストたちと共におふぎげに興じます。血をもとめるヴァンパイアがあどけない美女を湿った洞窟へ連れ去り、城砦の濠では首切り役人と拷問役が仕事を待ち構えています。片隅では魔女が秘密の飲み物を煎じ、混ぜ薬を煮ながら、何も知らない人たちに試しに飲ませて、効果の程を見届けようと待っております。狼人間は檻を破って、出たり入ったりしながら誰を獲物にするか探しています。美しい素敵な舞台ショーに息呑むことは請け合いです。モットーは《セックスとスリル、それにフランケンシュタインの神話》。毎度のように今年も新しい魅力的な出し物がいっぱいです。どのショーも一晩に三回繰り返します。>

チャのハロウィンらしきものはどこにも見えない。赤と緑と青のサーチライト。作動する造霧マシン。女子学生のS.とC.が参与観察に精を出している。二人は、半時間の処刑ショー（退屈だった!）の後、廃墟を一周する見学に向かう。〈お化け屋敷と言っても通り抜けるだけじゃないかしら〉、とはC.のメモである<sup>3</sup>。ところが、どうして。30種類もの〈映画やテレビでお馴染みのモンスターたちがずらりと〉揃っている。アクションだって欠けてはいない。早くも何体かが書割から抜け出してS.を目がけて〈つかみかかり〉、追いかけて、遂にコーナーに追い込んだかと思うと、最後はコースから引き攫う。お楽しみどころじゃない。ところが、S.の恐怖の叫びは怪物には励ましとでも聞こえたらしい。遂にS.は逃げ出した。〈沈黙した羊たちの群からハンニバル・レクターが〉<sup>4</sup>出現して追いかけて来て、とうとう彼女の靴を脱がせてしまった。その瞬間、S.はプログラムの〈一駒〉になってしまったと感じたものだ。〈他の見物人たちは、賛嘆とも羨望ともつかぬ眼差しを私に向けて、まるで私の代わりにそうされたいみたいだった〉。またC.はまどめにこう記す。〈仮面を着けたおかしな連中に追いかけてられて奇妙な気持ちになったわ。顔が仮面で隠れているので誰だか分からない者に捕まえられ連れ去られるのは、ひどく怖かった。ここでの出来事が遊びだってことははっきりしているのだけれど〉。

パフォーマンスが見物人をとりこにすることによって、観念としての演劇<sup>ドラマトルギー</sup>が若い女性には演劇的状況そのものへ変ってゆく。作り物（恐怖の演出）が約束以上の効果を発揮することは、主催者団体の段階では想定されていない。実際、意味の連鎖は〈プレイと真面目のあいだにある仮面〉<sup>4</sup>によって引きちぎられ、悪霊の記憶は悪霊に場所を譲る、ということだろうか。すべてが茶番劇（fun）である。

チェーンソーを振り回すモンスター役の男性俳優たちにとっては全てが〈メガ娯楽〉に他ならない、との簡潔な感想を、今回フィールドワークを行なった彼女たちは聞き取った。「劇場企画・真夜中の夢」社<sup>x</sup>は、1995年にフランケンシュタインでハロウィンのスペクタクルを担当した団体で、今日、プロデューサーの男性2人と振り付け師の女性2人からなるプロ集団となっている。売り物は「体験・不気味な美食」でターゲットにするのは企業の社内ピクニックである。もともと、フランケンシュタインでのハロウィンのよう

<sup>3</sup> この箇所は、フランフルト大学文化人類学／ヨーロッパ・エスノロジー教室で筆者が担当するプロゼミナール（2000/01冬学期）「現代の儀式」（Moderne Rituale）に学生カロリーネ・グレンメル（Caroline Gremmel）とサブリーナ・シャムバー（Sabrina Schamber）が提出したレポートによる。

<sup>4</sup> *Masken zwischen Spiel und Ernst. Beiträge des Tübinger Arbeitskreises für Faschnachtsforschung.* Tübingen 1967 (Volksleben 18).

## ヨーロッパ諸国のハロウィン (4)

な大きなイベントとなると、参加する若者たちからアマチュアの演者も募集する。そうしてリクルートされた〈モンスター〉たちにとって、〈仕事はそう実入りがよいわけではない〉が、〈楽しい〉ことが決定的となる。ではハロウィンについての歴史的な知識はどうだろう。誰もそれを尋ねないところをみると、必要ではないのであろう。では伝統は？演出ではモンスターは〈伝統に沿う〉ように数年前から心がけている、と言う。〈総じて《モンスター》は場面作りでは本来の主演という印象となるように、また入場者については不可欠のエキストラにして、それによって入場者たち自身も活発になれるように計算している〉、と言う。

### (考察)

世俗化が進んだ社会では、収穫感謝祭からクリスマス期が始まるまでの期間はシンボリックに乏しい時節である。もっとも、プロテスタント教会ではその間に宗教改革記念日(10月31日)があり、カトリック教会では万聖節(11月1日)と万霊節(11月2日)がありはするが、やはり〈できごとに乏しい〉と言うことはできよう。そうは言っても、ハロウィンの日取りがなぜそこに入ったのか、あるいは今後入ることになるかも知れない理由は厳密には明らかではない。経済が主導して系統的に進行するイノベーションに対して、なおグローバルな活動(M&A, ワーナー・ブラザーズ, ムーヴィー・ワールド)がそれに対抗しているところがある。またローカルな経済が中心でもローカルな価値付け(カーデヴェー<sup>3)</sup>, 携帯電話取ショップ, ペーパー製品ショップ, ディスコ)は、どこか他所から来たにせよ取り扱い業者と〈一緒にする〉ことを意味する面がある。90分のフットボールの試合をテレビで3時間番組に広げると好一對でもあるが、ドイツではハロウィンの期日がなお固定していないことから、4週間に引き伸ばされる。拡大ハロウィンは、いずれ一年の最後の四分の一を占めることにもなりかねない。もっとも、それはハロウィンがヨーロッパで立ち消えにならないことを前提にした場合である。事実、アメリカからのある手紙にはこう書かれている。〈ハロウィンがヨーロッパでそんなに盛んになっているのは、おかしな感じがします。こちらアメリカでは、やや下火です。……このところ、前ほどの盛況は見られなくなっています。それに教会が良い顔をしないのですが、それはヨーロッパでも同じでしょう〉、これはユタ州のロイ(Roy, Utah)からスーザン・アルバーツという少女がドイツへ書き送った手紙の一節である。ヨーロッパでハロウィンが盛んになっているのは、アメリカでのマーケットの萎縮へのビジネス面での補完措置なのであろうか。

## 文化人類学の理論に因んで

ハロウィンとハロウィン化の現象に消費人類学の面からアプローチするとどうであろうか。すると、儀式理論をめぐる論議の文脈において、いわば正に皮下構造とでも言うべきものが見えてくる。この小論のこれまで叙述は、ハロウィンという儀式を〈帰属無き共同〉(togetherness without belonging)、さらに〈義務無き帰属〉(belonging without obligation)<sup>5</sup>として特徴づける方向であった。これはまた、義務無き共生なる胡散臭いテーゼへと延びてゆく。もっとも、それは公衆に注目した場合のことである。私たちの異質的な社会をまとめることが儀式にできるのかどうかという問いも<sup>6</sup>、アクチュアルなハロウィン化の事例をみると追いつかれているかも知れない。金銭を超えて価値低下させられた生産者・消費者の関係の向こうで、(任意の対象であるにせよ)<sup>7</sup>ハロウィンという習俗対象を独自の創造性を以って(消費文化を正当化するような)操作が見て取れることがあるだろうか。私はむしろ根本的な提案をしたい。ハロウィンというびかびかの輸入レットルの下にある幾重もの層を系統的にはがし、共時性と通時性の絡まりを分離し、行動・コミュニケーション構造を問うのである。それは、2人の若い女性が、30種類ものハロウィン・モンスターとの出会いのなかでぼんやり感じとったものでもある。

## (クロード・レヴィ=ストロース)

レヴィ=ストロースが説いた儀式理論のコンセプトでは、小暗い半年間の諸々の習俗形態は“libertas decembris” (十二月<十月の自由)<sup>xiii</sup>の呼称のもとにまとめられた。その際レヴィ=ストロースは、さまざまな文化のなかから近似性が推測される歴史的な諸形態を引き合いに出すが、またレヴィ=ストロースにとってより重要であったのは、社会のなかに生きることの最も一般的な諸条件に属する〈思考・行動のあり方〉であった<sup>8</sup>。そして諸々の姿形の比較可能性、すなわち〈構造的な類同性<sup>アナロジー</sup>〉を考察する。そこから浮かび上がるのは、一つには転倒した世界であり、またそれにとまなう制限されてものとしての身分の

<sup>5</sup> Anthony P. Cohen, *Whalsay. Symbol, Segment and Boundary in a Shetland island community*. Manchester 1987, p.60.

<sup>6</sup> Wolfgang Heitmeyer (Hg.), *Was halt die Gesellschaft zusammen?* Frankfurt am Main 1997 u.ö.; Hans-Georg Soeffner, *Die Auslegung des Alltags. Bd.2: Die Ordnung der Rituale*. Frankfurt 1995 (2. Aufl.); Wolf-Dietrich Bukow, *Leben im der multikulturelle Gesellschaft*. Opladen 1993.

<sup>7</sup> 参照, Knut Hieckethier, *Apparat – Dispositiv – Programm*. In: Knut Hieckethier/Siegfried Zielinski (Hg.), *Medien/Kultur*. Berlin 1991, S.421–447.; Carsten Lenk, *Die Erscheinung des Rundfunks. Einführung und Nutzung eines neuen Mediums 1923–1932*. Opladen 1997.

<sup>8</sup> Claude Lévi Straus; *Der hingerichtete Weihnachtsmann*. (注1), S.181.



転換“upside down”であった。二つ目には、社会の諸々の集団が一時的に分割を起こすことであった。後者については、独自のまとまりを作ると共に年長者たちに対峙する存在でもある若者たちの行動である。彼らは、＜狂気じみた馬鹿げた振る舞いに身を委ねるが、それが干渉を受けるや、自己表現を強めて他の人々には災厄となるところまで進む。その極端なさまざまな事例はルネサンスまでみとめられる、とレヴィ＝ストロースは言う。悪態、盗み、暴力、さらに殺人までである<sup>9</sup>。この文脈の射程には（もとより文化的に馴致されたものとしても）ハロウィンは、そのアングロサクソンの形態をほとんど入ることはできない。アングロサクソン形態というのは、子供たちが妖怪や骸骨に扮して大人たちを追いかけ回し、しかも少々のプレゼントでは解放しないのである。因みに、そうした形態は、フォルクスタンデ民俗学では、攻撃的な物ねだり行事として現れるが、またシャリヴァリ<sup>xiii</sup>、猫囃子<sup>xiv</sup>、山羊皮の弾劾<sup>xv</sup>、さらにヴァルブルギスの夜<sup>xvi</sup>の狂乱といった強圧的な習俗形態をも想起させる。

#### (ヴィクター・ターナー)

ヴィクター・ターナーの言う一時的な闖入者がつくるコムニタスの概念では、闖入者が受け入れられるグループの如何に関わりなく、出発点では死と腐敗のシンボルが儀式的な演劇化を特徴づけるとされる。闖入者たちは性ある者としては規定されず、不潔で、無階層な存在とされる。彼らは普通ではない者として区分され、死がシンボルとなるところでは、屍として扱われる。どんな角度から見ても、あらゆる社会的区分における＜どっちつかず＞の存在でもある<sup>10</sup>。同時に、そのコムニタスは、生命力にあふれた結合過程との合体であり、闖入者の圏内では平等・団結・信頼・自生から成るストラクチャー社会構造である。あらゆる社会性・そのヒエラルヒー化され機能的・階層的に細分されたストラクチャー強制構造の標準とは対比的に、そのコムニタスはアンチ・ストラクチャーである、とターナーは認識する<sup>11</sup>。もとよりそのアンチ・ストラクチャーが前提とするのは、経過的位相の＜意味＞について社会が分有する知識である。二つの局面の関係は弁証法的である。すなわち、逆流的なものとしてのコムニタスは、一時的ながら、社会がもつ価値を棚上げし、社会への対抗的な輪郭を提示する。反省的にとらえられた世界の転倒であるが、これが共同社会の経験となれば、

<sup>9</sup> 同上, S.182.

<sup>10</sup> Victor Turner, *Betwixt and Between. The Liminal Period in Rites de Passage*. In: Der., *The Forest of Symbol*. Ithaca 1967, p.93-111.

<sup>11</sup> Victor Turner, *Das Ritual. Struktur und Anti-Struktur*. Frankfurt am Main/New York 1989, S.159ff.

闖入者が再び組み込まれるに及んで、結局、社会には良かれということになる、とターナーは理解する。

生ける死者、モンスター、ゾンビ、これらに扮する演者の一団は、どこで準備されるのか。一口に言えば若者である。彼らは進んで買って出て、訓練を受け、生産物の消費者グループとなり、一時的な一種のコムニタスを形成するが、コムニタスの存在理由は、パフォーマンスにあたって、生産の水準における〈やり過ぎ〉を大げさに強く印象づけて表現するところにある。その演者の共同社会は、野生的になり、大げさなアクションを見せ、やり過ぎまで行き、穏やかな拍手では満足せず、もっと注目を浴びようとし、ある種の勝手な名人藝を押し付け、リアリティを持たせ舞台に観衆を引き込もうとする。事実、目を輝かせる者も少なくない。観衆を行為のなかに引き入れ、観衆がもはや演目の対面者ではなく、その一部となるところまで進むのが、決まった型でもある。観衆のなかの数人を掴みとるのは、その手段に他ならない。つまり身体にふれ、掴み、身体を包みこみ、〈掴み取り〉と称されるように、全身もしくは身体の一部に手をだすことになる。これによって〈セックス〉への期待はサディスティックに果たされるのであろうか？ オリジナルのモットー「やっつけるぞ、それとももてなしてくれる (trick or treat)」は事実を語ってはいない。入場券はただ買っただけではない。〈犠牲〉の候補者として注目されることになったのである。となると、解放のための劇場であらうか。もっとも、C.もS.もそういう報告をしてはいない。むしろ引き込まれた者たちの重層した思念の経過、すなわち〈犠牲〉になるまい、不安、拒否、逃走衝動といった原初的な反応の連鎖としてアクティヴなあり方である。それは〈モンスター〉のメガ娯楽への不満を残した記憶でありつづける。〈こんな楽しみは他のどこでも味わえない〉、とCは、参加者の一人の声をメモしている、〈ここでは恐怖が権利をもつだけだから〉。〈私も真似をして何でもすることができた、他人にテロを加えて責任をとらなくてもよいなんて衝動は他所では決してできないんだから〉。

逆さまの世界プラス一時的なコムニタスである。〈怖い思いをさせられる〉ことを待ち構えている観衆がいる。その恐怖を自ら手がける演者たちは、プレイするだけでなく、〈本当に〉規則を破りもする。

ハロウィンは儀式であらうか？ フランケンシュタインの城でのモンスターの共演団体はそれを確信している。しかし、儀式の担い手であらうか。それとも儀式の担い手を演じているのであらうか。ハロウィンはおそらく儀式には当たらず、むしろ徒党を組むと言うべきであらう。参加者たちの反応も、儀式や民俗行事や伝統といった概念には首を傾げるも

のだった。注目すべきは、フランケンシュタイン城山の上でのハロウィンが常連の結びつきに繋がらないことである。この〈モンスターたちのホーム〉を数年間続けて訪れている参加者たちは誰もいず、また今後も来ることを考えている人はきわめて少ない。日曜の夜には、子供たち向けの〈穏やかな〉プログラムでは、〈かわいいモンスター〉が登場する。また参加者の分類はカスパル劇と博物館訪問の中間となっている。

## 事例2：ワーナー・ブラザーズ「ムーヴィー・ワールド」のハロウィン

もう一箇所、別の場所を取り上げよう。「ワーナー・ブラザーズ：ムーヴィー・ワールド」(Warner Bros. Movie World)<sup>xvii</sup> のハロウィンは、2000年の場合、十月の毎週の金曜と土曜がその期日であった。毎日6時間のプログラムで、合計すると48時間であった。主催者は(ロゴは「ドイツのハリウッド」)はチェーン展開を手がけているアメリカの“Six Flags”社<sup>xviii</sup>で、ヨーロッパでも、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツに7つの支店をもっている。会場はアウトバーン31号線のキルヒヘレン北インターチェンジに隣接するボトロップで、同社はそこに〈親しみのあるファミリー・レジャー・パーク〉を経営している。そのパークが、〈ハロウィン・ホラー・フェスタ〉(Halloween-Horror-Fest)のモットーの下、〈恐ろしい妖怪たちの村〉に変貌した。すでに9月には、ワーナー・ブラザーズ社の映画『小さなヴァンパイア』が世界中で封切られて、人々はハロウィンの気分誘われていたが、もちろん夏と冬の変わり目のイベントを見込んだシーズンとして位置づけられている。臨時スタッフを訓練する〈妖怪教習所〉もオープンし、そこには女子学生ドーラ・ゲールス(仮名)も参加した。すべての支店の標準になる“Six-Flag ハロウィン・マニュアル”(そのコンセプト：デコレーション、グラフィック、ドラマトウロジー、空間配置、料理)としてアニメのWB「共同補助員オン・ステージ」が制作された。〈おぼさんの筆筒を整理してごらん、コスチュームを着けるのが嫌な人は、せめて黒い服装をすること〉。〈妖怪のメーキャップ〉もそれぞれの個性の発露に任される。もつとも、〈血や傷を過度に強調する〉のは却って馬鹿にされる<sup>12</sup>。演劇のプロ数人も参加した。WBのコミュニケーション言語のラベルは英語である。そこで企画の内部で行なわれる〈妖怪らしい〉コスチュームのコンクールは“Best Outlet Competition”と呼ばれ、内部の意思疎通のためのパンフレット“Backstage Halloween-Special”を通じて行なわれる。そこには頭蓋骨や死神や蜘蛛のシンボルなどが現れて、10月6日までの毎日、カウント・ダウン方式で繰り返される。パンフレットにはハロウィンの“roots”についてもインフォメーショ

<sup>12</sup> Backstage Halloween Special 2000-10-02, Warner Bros. Movie World.

ンが入っている。例えばパンの迷信などである。

ハロウィンには旅役者たちも計画的に投入され、彼らによるホラー映画の模倣や新作ショーが取り入れられる。料理のメニューには、〈ウィーン風カツレツ：蛆虫粉入りの油のために骨片（フライド・ポテト）の取り合わせ、ねばねばのマッシュルーム・ソース〉などと謳われている。一日入場券は40マルク、シーズン・パスは59マルク、駐車場は無料。ハロウィンの宣伝には折りたたみ4ページのパンフレットが作られ、そこにはカリフォルニア州バーバンクのWB「ドラキュラ」<sup>xix</sup>アーカイヴからとられたシンボル・キャラクターのクリストファー・リー<sup>xx</sup>の写りが載っている。解説には、小説フランケンシュタインを計算に入れた気配が窺える<sup>13</sup>。またシックス・フラッグ社系のハロウィンについて立地を案内するのはグラフィック・デザイナーには刺激になったらしく、化け物コースターとパンプキンと恐怖の文言のミックスである。子供向けのハロウィン・プログラムはまことに盛りだくさんである。

ドーラ・ゲールズの報告：„Trick or treat“<sup>フラウホ</sup>の行事の実際は、ワーナー社のキャラクターがあちこちで菓子類を配った。キャラクターたちと子供たちの中で特に交流はみとめられなかった。コスチューム・コンクールへの子供たちの参加は多くなく、応募者も見物客も少なかった。それに対してカボチャの切り込みは、大人にも大人気だった。入場客の多くは小グループだったが、〈ハロウィン風〉の装いや化粧は皆無に近かった。ただ、そこかしこに、若者たちの一団で、まともな出で立ちのものが見受けられた。全体として言えば、訪れた人々のほとんどはホラー表現には尻ごみ気味で、普段のテーマ・パークを楽しむ日常的な姿勢から抜け出そうとはしていなかった。人々は〈むしろ受身的な役割を引き受け、何かを期待をもって臨んでいた〉、というのが、〈オン・ステージ〉臨時スタッフとなった参与観察者のまとめである。ちよっぴり楽しみ、ちよっぴり怖がらせてもらう、それでもユピター灯<sup>xxi</sup>の鈍い余光は舞台を照らしてホラーを盛り上げる。

## まとめ：儀式とシンボルの検討

最後に、ハロウィンを儀式（Ritual）としてスケッチ程度ながら体系的に理解することを試みたい。ハロウィンは、先ずは世俗的な行事であり、そこにはインターネット的な百

<sup>13</sup> 次のような解説が付いている。〈ハロウィン—秘密にあふれた伝統。何世紀も前から毎年十月になると、蘇った死者、妖怪、魔物が地上に降りてきて、薄笑いを浮べるパンプキンのなかでちらちらと燃える明かりを受けて怪しく出現する……〉

科事典の性格が付着してもいるが、それはまた特にフランスではキリスト教会の側かららの新異教へのわだかまりを刺激した。また表層的でもあるため厳密な形式を必要としない。これは、現象の水準（消費、エンタテイメント、教導性、メディアなど）から期日の不安定を経て、それへの参加のアド・リブ性にまで及んでいる。ハロウィンのプラズマさながらの広がり<sup>リトワール</sup>と儀式概念が漠然としていることが、ハロウィンを儀式として位置づけることには無理があることをしめしていようが、逆にエスノロジーの分野では儀式の概念を拡大する傾向もみとめられる。ウルズラ・ラオとクラウス・ペーター・ケッピングは、儀式を先ずはパフォーマンス行動とする因習に従った定義を行ないながらも、それは〈伝統の後追いとして完遂された行為の反省的な獲得〉を特徴とするとしている<sup>14</sup>。ハロウィンはかかる問い直しの証左に向いているとも見えるが、同時にパフォーマンス行動だけにとどまらず、それ以上でもある。加えて、そこで起きる諸々の問いは当然ながら研究者を刺激する。すなわち、然らばどの伝統が誰によって反省的にとらえられるのか、いかなるモチーフがそこに盛り込まれるのか、後追いの仕方はどうなのか、そもそも映画作品の再演は文化の模造でしかないのではないのか、といった問いである。これらについてラオとケッピングが聴かせる弁論には前向きに響くところがある。すなわち、演技スタッフの行動それ自体は非反省的な行動も、観衆によって意識的にそれとのアイデンティティがもとめられる瞬間にはじめて儀式へと変質することができる、と言う。決定する力を持っている（あるいは、決定力そのものとなる）のは観衆である。しかしムーヴィー・ワールドの観衆は、儀式に居合わせることへとようやく促される段階であり、そうである以上、差異的な価値としての〈儀式〉はなお到来しなかったことになる。別の例をとると、二人の〈意識的な観衆〉とハロウィン〈儀式〉（つまり自己を差異あるものとする演者グループの思念）との出会いは、何よりも企業組織の性格にある儀式に参加することへと延びてゆく。しかしこのグループが実演するのは逸脱となりかねないほどの心理的圧迫である。かくして全体としてのハロウィンは〈儀式の革命〉を意味し、カーニヴァルの旧態然たる暴威を内に隠しているとも見えるが、同時にこれと相容れないのは、ハロウィンがカボチャをもちいて親しみあるものとなっていることである。ハロウィンでは、異常なものが演じられる、それを通じて何がノーマルであるかが示唆されるのではなく、少々踏み外しはあるものの、ノーマルなものがノーマルものを確かめるのである。

<sup>14</sup> Ursula Rao/Klaus Peter Köpping, *Transformation der Wirklichkeit. Der Begriff des „Rituals“ läßt sich ausweiten, ohne daß seine Konturen verschwimmen*. Frankfurter Rundschau 7. XII. 1999. (新聞『フランクフルト週報』の記事「変化する現実のなかで：《儀式》の概念は拡大するが、その構図は消え去らない」)

ハロウィンは何のシンボルであろうか。ハロウィンのインデックス性、すなわち儀式ではとらえられないシンボリックな行為や社会的現実については、その実態に焦点を当ててループで調べてもよいであろう。ハロウィンは、たとえば、体験型テーマ・パークのインストラクターにとっては創造活動の刺激となることなどが挙げられようし、それは延いては企業内の競争へとつながってゆく。コンツェルンの側面から見れば、一面では「平板な時間のなかで生き生きした特殊活動であり、他面では法人としてのアイデンティティを強化するためのキャンペーンでもある。テーマ全体という水準に足を踏み入れ、それによって文化批判にまで進むと、社会の意味剥離、消費における意味の代替、擬似宗教性、プラシーボ<sup>xxii</sup>その他へとつながってゆく。しかしまた文化人類学の言い方では、劇場としての儀式である。

のみならず、儀式は世界を観照するだけではなく、世界を変えもする、トラオとケッピングは指摘する。人間がこの <祭り> を日常とは対照的な青写真とする用い方がどうであるかは、なお調べてみなければならない。つまりカレンダーへの移植が必要なのかどうか、と問うこともそうであろう。混交的なものとしてのヨーロッパの主権へのどんな要求をアメリカは私たちにプレゼントしてくれるのか、これは今後待つほかない。

[訳注]

- i p.152 (S.273) 「ハロウィーン彗星」：ハレー彗星のもじりのこのタイトルは、新しい祭りを対象とした研究にとって先駆的であったレヴィ=ストロースの論文「処刑されたサンタクロース」のドイツ語訳が図書情報の年鑑『彗星』に掲載されたことに因むようである。参照、原注1。
- ii p.152 (S.273) ダッジとビュイク (Dodge und Buicks)：どちらも米国の乗用車の車種。“Dodge”は現在はChrysler社の一部門が作っている。“Buick”は自動車製作者David D. Buick (d.1929) に因み、GMの一部門が手がけてきた。
- iii p.152 (S.273) フランケンシュタインの城砦跡：ここで言われるドイツ中西部ラインラント=プファルツ州のフランケンシュタイン (Frankenstein/Pfalz) は、人口千人余りの町で、12世紀に遡る城砦跡がある (まったくの廃墟ではなく、後世の補修と近代の改築によって建物のかたちを保っている)。米軍の主要な駐留地の一つダルムシュタット (Darmstadt) に近い。なおフランケンシュタインの地名はドイツに何箇所も見られるが、いずれもゴシック・ロマンとは無関係である。
- iv p.152 (S.273) メアリー・シェリー (Mary Wollstonecraft Shelley 1797-1851) の小説フランケンシュタイン：小説作品『フランケンシュタイン、すなわち現代のプロメテウス』(Frankenstein or the Modern Prometheus) は1815年に刊行された。若き科学者ヘンリー・フランケンシュタインは墓地から盗み出した死体を接合し、稲妻を活用して高圧電気を通して人造人間を製作する実験を行なう。しかし死体に埋め込まれた脳は凶悪犯罪者のものであり、無差別に殺人を犯すモンスターが誕生する。怒った村人によって風車小屋に追いこまれたモンスターは小屋もろとも崩れ去る。この内容は1931年

## ヨーロッパ諸国のハロウィン (4)

の映画化となったが、第一作を演じたボリス・カーロフのモンスター役としての印象が強く、筋の上では科学者の名前であるフランケンシュタインが怪物と取り違えられることとなった。次のボリス・カーロフを参照。

- v p.152 (S.273) **ボリス・カーロフ** (Boris Karloff 1887-1969)：イギリスのロンドンで生まれ、少年時にカナダへ移住し、アメリカで活躍した映画俳優。はじめサイレント映画で脇役であったが、1931年にユニヴァーサル映画社の『フランケンシュタイン』(Frankenstein)にモンスター役に起用された。科白の無い役柄であったが、面長で額の広い顔立ちを活かし、無表情でありながら哀歎を漂わせて存在感を発揮し、怪奇スターの地位を確立した。フランケンシュタイン・シリーズでは、1935年『フランケンシュタインの花嫁』(Bride of Frankenstein), 1939年『フランケンシュタインの復活』(Son of Frankenstein)を演じた。
- vi p.153 (S.273) **ハイデルベルク** (Heidelberg)：ドイツ西南部、バーデン＝ヴュルテムベルク州北辺のネッカー河畔の古都でロマンティックなイメージが付着している。事実としてロマン派作家の活動の拠点の一つであったが、その名を特にポピュラーにしたのはシェッフエル (Josef Viktor von Scheffel 1826-1886)の詩「アルト・ハイデルベルク、汝、麗しき町、誇り富める都…」(Alt-Heidelberg, du feine/Du Stadt an Ehren reich...)がツィーママン (S. Anton Zimmermann 1807-1876)の作曲によって学生歌として人気を博したこと、さらにその詩をタイトルにしたマイヤー＝フェルスター (Wilhelm Meyer-Förster 1862-1934)の戯曲「アルト・ハイデルベルク」(Alt-Heidelberg.)によってであった。1901年にベルリンで初演されたこの作品は、ザクセン＝カールスブルク公国皇太子カール・ハインリヒと下宿の娘ケーティの身分違いの悲恋を描き、20世紀前半のドイツで最も多く上演された戯曲の一つとされる。世界各国でも評判となって、身分違いの恋愛を扱う多くの戯曲・映画・ミュージカルの原型となった。
- vii p.153 (S.274) **イキーノグラフィ** (Ikino-graphie)：入場券を買って奇怪なモンスターを相手にすること、特に映画の古典的なキャラクターとして知られるフランケンシュタイン (モンスター) やドラキュラ、さらに最近の話題作の主人公ハンニバル・レクターなどが取り入れられているところから、<イコノグラフィ> (Ikono-graphie 図像学) と<キーノ> (Kino<Kinomatograph 映画 [館]) を重ねたギャグのようである。
- viii p.153 (S.274) **ヘンナ染め刺青のスタンド** (Henna-Tattoo-Stände)：ヘンナは指甲花ならびにその樹皮から取った黄色の染料で、本物の刺青ではなく、一時的に刺青風の模様を皮膚に施すことがあり、ここはその屋台。
- ix p.154 (S.274) 沈黙した羊たちの群から**ハンニバル・レクター** (Hannibal Lecter) が現れ出て：アメリカの作家トマス・ハリス (Thomas Harris 1940 born in Jackson/Tennesy) の種々の小説に登場する主人公。ハリスは地方紙“News Tribune”の記者を経てAP通信社のレポーターと編集長を兼ねた後、作家活動に転じた。小説『レッド・ドラゴン』(Red Dragon. 1981)でハンニバル・レクターを登場させ、次いで小説『羊たちの沈黙』(The Silence of the Lambs. 1988)でさらにその特異な人物像を形作った。その後も、この主人公を登場させた作品を書いている。作品の設定では、リトアニア生れのイタリア系貴族の家系に生れたハンニバルは、少年時にナチス・ドイツによるポーランド制圧下とその後の親ナチス者への圧迫という緊迫の中で逃亡者たちが閉鎖状況のなかで飢餓・殺人・人肉食、特に妹ミーシャが食べられるのを目にしたことから失語症にして異常性格となる。長じて精神科医として異才を発揮しながら、他方で殺人欲と人肉嗜好を併せもち、やがて逮捕され収監される。『レッ

『ド・ドラゴン』はハンニバルを逮捕したFBI顧問捜査官グラハムが折からの一家惨殺事件の解決のために取監中のハンニバルの知恵を借りるが、ハンニバルは同時に殺人犯とも文通をしていたという設定。タイトルは、殺人犯人が、ウィリアム・ブレイクが『ヨハネの黙示録』によって描いた水彩画「大いなる赤き龍と日をまとう女」のドラゴンに自己を重ねるというストーリーによる。『刑事グラハム／凍りついた欲望』(Manhunter. 1986 マイケル・マン Michael Mann監督)として映画化された。; 『羊たちの沈黙』は、FBIアカデミーの女子学生クラリス・スターリング捜査官が連続女性誘拐殺人犯パッファロー・ビルを追跡するために取監中のハンニバルを訪れ、あしらわれるが、囚人に侮辱されたことへ償いとしてヒントを与えられることにはじまり、やがて犯人の追跡に彼女自身の経験と深層心理の解き明かしがハンニバルと彼女のやりとりのなかで進んでゆく。それと共に上院議員の娘が誘拐されたことを解決に導く代わりに条件のよい監房に移ったハンニバルは2人の看守を殺して脱出し南米へ逃れる。1990年にジョナサン・デミ (Jonathan Demme 1944 born in NY) 監督作品として映画化され、アカデミー賞を受賞した。配役はハンニバル：アンソニー・ホプキンス、クラリス：ジョディ・フォスター。

- x p.154 (S.274) 「劇場企画・真夜中の夢」社 (Theaterunternehmen Mitternachtstraum) : 原語をここで表示する。
- xi p.155 (S.275) **KadeW** (カーデーヴェー) : „Das Kaufhaus des Westens“ (ウェスト・デパート) を略したもので、ドイツ最大の老舗百貨店。1907年にユダヤ人商人で商務顧問官であったアドルフ・ヤンドルフ (Adolf Jandorf 1870-1932) がベルリンの西区域に創設した。立地のタウエンツィエン街 (Tauentzienstraße in Berlin/Schöneberg am Wittenbergplatz) は当時はシャルロッテン市であったが、1920年に市域拡張によってベルリン市内となった。シャウト (Johann Emil Schaudt) の設計になる6階建て・売り場面積24,000m<sup>2</sup>の店舗は当時では画期的であった。第二次世界大戦中の1943年に爆撃で破壊されたが、1950年に再開した。現在は売り場面積60,000m<sup>2</sup>とされる。
- xii p.156 (S.276) “**libertas decembris**” : 古代ローマでは “december” は語義では十月、後に July と August が追加されたため十二月の呼称となった。この月には価値の転倒を意味する行事が行われていたことを踏まえて、十月 (or 十二月) の自由をレヴィ=ストロースは論じている。
- xiii p.157 (S.277) シャリヴァリ (charivari) : 不釣り合いな結婚や、周囲への振る舞いを怠る新婚カップルなどへの嫌がらせや揶揄として、若者組あるいは大勢の若者たちが、鍋や釜などあり合わせの道具で騒音を立てて囃したる習俗。語源は定かではなく、擬音語とも、ラテン語 “caribaria”, 中期仏語 “charier/charroyer + varier” ともされる。
- xiv p.157 (S.277) 猫囃子 (Katzenmusik) : シャリヴァリと同種の習俗を指すドイツ語。猫はまがいものであることを揶揄する比喩。
- xv p.157 (S.277) 山羊皮の弾劾 (Haberfeldtreiben) : 伝統的な制裁習俗。仮面や扮装の者たちが、特定の人物を夜中に襲って、堆肥車に立たせて、韻文の罪状を読み聞かせる。裁判のパロディーでもあり、性的な不始末を犯した者になされることが多かったとも言われる。19世紀にはその濫用を咎めて、行政や官憲によってたびたび禁令が出された。語義は定かではなく、<カラスムギ畑の追いたて>とも訳せる。
- xvi p.157 (S.277) ヴァルブルギスの夜 (Walpurgisnacht) : 参照, U・ムーリ/G・ギュール「… スイスのハロウィン」への訳注viii.
- xvii p.159 (S.278) 「ワーナー・ブラザーズ：ムーヴィー・ワールド」 (Warner Bros. Movie World) :



## ヨーロッパ諸国のハロウィン (4)

WB.ないしはW. Bros.と略記される「ワーナー・ブラザーズ」はワーナー4兄弟によって創設された映画配給会社・映画スタジオで、本社所在地はカリフォルニア州バーバンク (Burbank, Cal.)。：ここで話題になるのは、1996年6月にドイツのノルトライン=ヴェストファーレン州ミュンスター県ポトロップにオープンした映画作品に強く傾斜したテーマ・パークで、「バヴァリア映画パーク」が廃止された跡地に建設された。面積45ha., 年間の入場者数は約100万人。現在は「ムーヴィー・パーク・ジャーマニー」(Movie Park Germany bei Bottrop-Kirchhellen) と呼ばれ、次の6つのセクションに分かれる。The Wonderreich, Hollywood Street Seit, Streets of New York, The Old West, Nickland, Santa Monica Pier.

xviii p.159 (S.278) シックス・フラッグ社系：„Six Flags“ はアメリカのテーマ・パーク運営会社。1961年にテキサスに最初のパークをオープンさせた。1984年にWBとライセンス契約を結んで、同社がもつ映画のキャラクターを活用すると共に、その運営を引き受けるようになった。ドイツのポトロップ=キルヒレンの“WB-Movie World”は1999年にシックス・フラッグズ社の運営となった。なおその名称は、テキサスを領有した歴史上の6カ国、スペイン、フランス、メキシコ、アメリカ連合国(1861-65 南北戦争期の南部同盟)、テキサス共和国、USAを指す。全米に30の施設を有し、ヨーロッパにも進出しているが、特にスリリングなジェットコースターによって知られる。

xix p.160 (S.279) カリフォルニア州バーバンクのWB「ドラキュラ」アーカイヴ…：WBについては前掲訳注xiv「ワーナー・ブラザーズ」を参照。ドラキュラは、イギリス領時代のダブリンに生れたアイランド人作家ブラム・ストーカー (Bram < Abraham Stoker 1847-1912) の小説“Dracula” (1897) が原点となり、その後、映画化によって一層親しまれるようになった。ストーカーが素材としたのは中世のワラキア伯ヴラド3世ツェペシュ (Vlad III, Țepeș, Drăculea 1431-1476 or 77) にまつわる伝承であった。史実に近づけると、伯には<ドラキュラ>に類した呼称があったようであるが、それは<ドラゴンの子>の意であり、15世紀前半から半ばのバルカン半島の政治情勢を背景にしていた。ドラキュラの元になったのは職階名で、父親ヴラド2世がオスマン・トルコとの係争や領国内の取りまとめの上で後ろ盾になる権威としてドイツ王・神聖ローマ皇帝ジギスムント (Sigismund 1368-1437, 1410以来ドイツ王, 1433皇帝) を頼り、ジギスムントからドラゴン騎士団 (Societas Draconis[trorum] : ジギスムントと妃によって1408年に創設されたキリスト教の護教軍団で、龍を退治した聖ゲオルクを守護者とした) のメンバーの名譽を与えられたことに因む。息子のツェペシュはそれを引き継いだようである。

xx p.160 (S.279) クリストファー・リー (Christopher Frank Carandini Lee 1922 born in London) : リーは出演した映画250本とも言われるが (ギネスブックに記録)、特にドラキュラ役が有名である。1957年にイギリスのハーマン・フィルム・プロダクション製作の『フランケンシュタインの逆襲』(The Curse of Frankenstein. 監督: Terence Fisher) でフランケン男爵役のピーター・カッシングと組んでモンスターを好演して注目され、次いで同じコンビで『吸血鬼ドラキュラ』(Horror of Dracula. 監督テレンス・フィッシャー) に出演した。リーはこの第一作を含めて合計9本製作されたドラキュラ・シリーズのうち7本に出演した。

xxi p.160 (S.279) ユピター灯 (Jupiterlampe) : 映画撮影・舞台照明・手術台などで用いられる強力電灯

xxii p.162 (S.280) プラシーボ (placebos) : 新薬テストの際に対比的に用いられる有効成分を除いた偽薬、対照剤。

## ラインラントのハロウィン — 研究プロジェクトへのノート

アーロイス・デーリング (ボン)

[原タイトル] Alois Döring (Bonn), *Halloween im Rheinland – Notizen zu einem Forschungsprojekt*

1999年秋、ボンの国土研究LVR局(LVR-Amt)は、「ライン地方のハロウィン」という長期プロジェクトを発足させた。ここでは、それをかいつまんで紹介する。

### ライン地方の祭り暦におけるハロウィン

ハロウィンはライン地方を発見し、ライン地方はハロウィンを発見する。2, 3年前から、アメリカから輸入されたこの行事(ブラウホ)が、都市部はもちろん田舎でも爆発的に広まりつつあることが記録されている。以下はそのスケッチである。

スナックや大学生寮では恐怖のパーティーが開かれる。幼稚園や学校ではハロウィンのデコレーションの手作りにいそしむ。家々の窓、庭の手前、小売商店、薬局、花屋、これらの場所にはありとあらゆるパンプキンが並んで、中には灯りが揺れている。特にカーニヴァル商品店はハロウィン・ファンにも気を使う。何週間もにわたって、郵便ポストはあらゆる種類のハロウィンの広告で溢れている。新聞にはハロウィンの催し物が載るが、誰もが知る通りのステレオタイプの意味付けの観もないではない。ケルト人、魔女、<sup>デーモン</sup>魔物たち……

<怖い地元の小旅行>とは『ライン・ポスト』紙が2000年10月27日付けで載せた見出しで、ニーダーライン地方の町々を概観した記事である。<扮装して、いちゃついて、飲んで、踊って：正にカーニヴァルそのもの。ところが違う、ハロウィンはもう少し恐ろしい、しかし残念なことに少し短い、虜にした者の血を吸うのも、ただの一夜のことなのだ>、これがイベントを伝える記事の見出しの文言である。他にもある。<ギャラリー・カフェで大きなパンプキンを期待しよう>(メンヒェングラートバッハ Mönchengladbach), <ハレルヤで開くハロウィン>(クレーフェルト Krefeld), <サウンド・ガーデンでのヴァンパイアの踊り>(ドゥイースブルク Duisburg), <ハロウィン、溶鉱炉でのいちゃつきパーティー、モットーは魔女が悪魔を探している>、そして<ツァック (Zakk)<sup>i</sup>でのハリー・ポッターとハロウィンのパーティー>(デュッセルドル

フ Düsseldorf)。

アイフェルの町モーンシャウ (Der Eifelort Monshau) は〈ハッピー・ハロウィン〉のモットーの下にハロウィンを数日間続きの町の祭りとして取り上げた。企画演出はモーンシャウ町の観光協会であった。人気は上々で、そのプログラムは特に家庭の観点から大いに受けた。子供たちが参加できるパンプキンの人形作りの大規模なコンクールなどのアクションが含まれていたのである。ハロウィンのファンたちは、その新しい祭りを〈もう一つのお祭り行事のチャンス〉として喜んでいる。ある若いモーンシャウのヴァンパイアは興奮してこう語る。〈本当の信奉〉。

1990年代の半ば、ティサベ・ツィーママン=ハインリヒは郡庁地バート・ノイヤール=アールヴァイラー市 (Bad Neujahr-Ahrweiler) に「ハロウィンの小山羊たち」(Halloween-Kids) なる協会を設立した。彼女は、子供たちに扮装や化粧をさせ、アメリカの先例通り家々を廻る“Trick or treat”を行なわせた。このめざましい成功は、保養・交流協会 (Kurl- und Verkehrsverein) を動かした。その結果、2000年には、子供たちの物ねだり行事に加えて、恐怖型のアクションも取り入れられた。小学校の生徒たちが妖怪の音楽隊になり、ダンス教室が幽霊を演じて盛り上げたのである。

ハロウィンをこの地方の祭りカレンダーに定着させるのは、ハロウィン用品のマーケット責任者にとっては、成功する可能性が高いマーケティング戦術である。「ハロウィン：ドイツでもこれを新しい儀式に」、これはルービーズ・コンツェルン<sup>ii</sup>の宣伝コピーである。同社は、今日、ハロウィンやカーニヴァル、それにパーティー用品を対象に全米のマーケットの70%を占め、さらにアジアとオーストラリア、そしてヨーロッパのマーケットへ進出している。因みに、ルービーズ・コンツェルンの支社の所在地はドイツではケルンである。その広報戦術家たちにとって明らかながらがある。ドイツのハロウィンは〈一時的な流行現象〉ではなく、むしろ〈一年を通じた儀式〉となったのである。〈ドイツ連邦共和国の祭りカレンダーのなかで、万聖節の前夜に団体で扮装の祭りが行なうのは、義務的な日取りであり、また数週間後に行なわれるはめをはずしたカーニヴァル=ファッシング・パーティーへの訪問も同様である〉。それゆえ、「ルービーズ・ドイツ」は、アクセサリ、コスチューム、化粧、デコレーション、パーティー用品の贅沢なカタログを作って、〈ハロウィンに向けた顧客のあらゆる要求〉に答えている。

## 民俗学の地方支部による短いアンケート調査から

ドイツの諸地方におけるハロウィンの広がりを見渡すために、ライン地方・国土研究

LVR局 (LVR-Amt) は、2001 年春に民俗学研究支部と大学に属さない諸機関にアンケート調査を行なった。以下は、目下返事があったもののなかから抜粋した。ミュンスターでは、5、6年前から主に大学生のグループのあいだで行なわれており、そこから徐々に幼稚園や小学校にも広がっている。たとえば子供たちが扮装の衣装をつけている (ヴェストファーレン民俗学コミッション/所在地: ミュンスター)。行事の当面の役割は、学生や<イヴェントに関心のある> グループの人々に割り当てられ、デパートはその日取りに向けて準備をした。ここに上げた諸地域からも、報告自体はまだ届いていない (民俗学支部/シュトゥットガルト)。

ハロウィンは若者たちの間ではプレゼントをねだる行為と一体となって、また小学校低学年や託児所では工作の時間と組になって興味がよせられている (ソルベン博物館/コトブス)。ハロウィンはその地方では広がりつつある。子供たちは変装して家々を歩き、プレゼントをねだるが、それは特に都会から移り住んだ人々による新しい団地においてみとめられる (メクレンブルク=フォアポメルン民衆文化研究所/ロストック)。この数年になってはじめて、メディアもハロウィン行事を注目すべきものとして関心を寄せている (ザクセン歴史・民俗学インスティテュート/ドレスデン)。最近の動向として、ディスコで催しものが企画され、学校では読書の夕べのテーマに怖い話や妖怪の物語が取りあげられ、さらにデパートでもハロウィン・グッズが売れている (ザクセン・アンハルト地域のふるさとの会/ハレ)。この数年の動きとして、メディアにおいてときどきハロウィンがテーマになる (チューリンゲン・民俗学による助言とドキュメントのインスティテュート/エルフルト)。まとめ: ハロウィンはバルト海地域では見出されるが、東フリースラントではみとめられないことは <ハロウィンは当地では知られていない> とあることが示している (東フリースラント地方局/アウリッヒ)。

## ボンのハロウィン・プロジェクト

ボンに所在するライン地方国土研究 LVR 局 (LVR-Amt) の研究プロジェクト・チームは、これまでも触れたようなハロウィン行事をアクチュアルな動向と実際の現象を明らかにするが、またそれにとどまらない。研究チームは、たとえば、ハロウィンとカーニヴァルの関係、あるいはマルティーン祭における子供フェスタとの競合関係なども解明しようとしている。さらにメディアの影響や種々の企業のマーケティング戦術の影響も調査している。それと共に、<ハロウィンにおけるライン地方の特殊性> をも射程に置いている。それによって、この祭りの出自と系譜を解明する上での新たな手がかりをつかむことをも意図している。

## ヨーロッパ諸国のハロウィン (4)

研究プロジェクトでは、昨年 (2000 年)、対象地点を選んでハロウィンについてインタビュー形式で調査を行うことをプログラムに組み入れた。その結果をもとに評価を試み、その成果は来年秋にハロウィン新聞とインターネットのウェブサイト (www.halloweeim.rheinland.de) で公開する予定である。今年 (2001 年) についても、インタビューを続行し、深めたものとなることを心がけている。またラインラントについてはアンケート形式での調査も予定している。それと共にドキュメント映画も企画しており、〈ライン地方〉のハロウィンの体裁になるはずである。ボンの研究は、学術報告を併せた展示としてもまとまる運びであり、それは2年後 (2002/2003) に輪郭を得て配布することになろう。

### [訳注]

- i p.166 (S.281) ツアック (Zakk) : „Zentrum für Aktion, Kultur und Kommunikation“ (アクション=文化=コミュニケーション・センター) の略語。ドイツ諸都市の中心部に設定された社会文化的な中心で、音楽や演劇など種々の文化行事から政治論議まで種々の催し物が連続して開催される。デュッセルドルフのZAKKは1971年に設けられ、ドイツで最も早く、また最も規模が大きい。
- ii p.167 (S.282) ルービーズ・コンツェルン (Konzern Rubie's) : 世界最大のコスチューム服飾メーカー。1951年のニューヨークのクィーンズに、ルービーンとティリー・ページュの2人が新聞・雑誌・小物類を扱うキャンディ店 “Rubie's Fun House” をオープンした。60年代からは劇場の注文を受けてコスチュームを手がけるようになり、1969年に “Rubie's Costume Company” となり、現在では世界各国に拠点を設けている。映画の人気コスチュームを一般向けに提供する他、ハロウィン・グッズについても大手メーカーでブランドである。

## 現れ出たのは蠅の神<sup>i</sup>

ザビーネ・デリング=マントイフェル (アウクスブルク)

[原タイトル] Sabine Doering-Manteuffel (Augsburg), *Zeichen vom Fliegengott*

数年前から十月31日の前後に新しい行事が広がりつつあるのが観察される。例えばアウクスブルクで町の酒場に注目してもよい。行事は1990年代終わりに先ず都市に根付き、やがてもっと小さな町村体にも波及した。その行事とは、一般にハロウィンと呼ばれるものに他ならない。村はずれの団地で初めて真黄色のカボチャを自分の家の戸口に吊り下げたり、あるいはプラスチックの骸骨を樹に掛けたり、玄関前の庭を低学年の子供のための化粧物コースターに変貌させたのは、都会からやって来た若い数家族だった。これと並行して、1980年代末から90年代初めに見られたカーニバル行列のときのライヴ・パフォーマンスのような若者文化も盛んになった。その期日を教会暦の上においてみると、少なくとも高齢の人たちの思い出のなかでは、家族のなかの物故者を静かに追憶するべき時に、問題のイベントが企画される。早い話が、今日では、恭しく墓参をする代わりに、虫のゼリー煮を献立に出したり、夜中氷水に漬けておいたゴム手袋の手を誰かの背中にすべりこませるといった恐怖のパーティーが賑わうのである。

これは、もちろん上古のケトルとの儀礼に由来する、一体、他に何が考えられるだろう、と言う。因みに新聞記事の解説によれば、昔のアイルランド人は(ともあれ彼らも嘗て異教徒だったわけだが)、そうして悪霊を家から退散させたとされるが、それは、霊が何よりも恐れるのは霊だからであった。

さてこの季節には、誰もが自分の楽しみに対しては自分で責任をもつ。言い換えれば、何でもありである。もっともそこまで言ってしまうと、ハロウインをめぐる議論はそれでお終いになりかねない。若者の抵抗と退屈、趣味の工作教室と大西洋をまたいだ文化の西漸、宗教的・霊的惑乱とおふざけ仲間、これらのどんな混合がこの新来の行事を花開かせることに貢献したのか、このけたたましい世界では、誰もそんな疑問に興味をもってはいまい。それに、これらの諸々の分野はどれもすでに十分研究されてもいる。どの家の戸口にもアメリカが必要なのだろうか、コカコーラでは足りず、ハインツ・ケチャップの57種の銘柄<sup>ii</sup>でも足りず、タッパーウェア・パーティー<sup>iii</sup>とエイヴォンの相談員<sup>iv</sup>でも足りず、電子レンジとドーナツとベーグル<sup>v</sup>でも足りず、それらに加えてさらにジャック・オ・ランタン<sup>vi</sup>に私たちの日常を弥が上にも豊かにしてもらわなければならないのであろうか、こう問うこと自体が、けばけばしいドンチャン騒ぎ同様、人を疲れさせるもの以外の何も

のでもない。ハロウィンは、行事としては、あるいはマーケットとして操縦される集団性の迎合姿勢のヴァリエーションと呼ぶとしても、それが掻き立てる関心の度合いは昨日の新聞という程度である。のみならず、リンダ・デーが数年前に指摘したところによれば、今日、魔術的な装いを示すものは偶然生れたのではなく、企業と広告戦術の全体が、人間がそうした場合に必要とする小道具で有頂天にさせることを計算していわけである<sup>1</sup>。墓地のゴミを探しながら、偶々関係するアメリカの提供者のウェブサイトを覗いた人なら、そこにそれを見出すだろう。時代精神が水門を開いたとき、その戦術が手をつけたのは、ヨーロッパ市場であった。しかしそれは、商業の一大センターたるアムステルダムにも、ターンテーブルのロンドンにも、あるいは国際貿易の拠点たるバンコクあるいはシンガポールにも起きて不思議ではない。障壁があるとすれば、精々、旧東欧ブロックのなかのカトリック教会を基盤とする諸国家くらいであろう。さりとて、埋め合わせをするような影響への期待へのきっかけを与えるわけではない。街路には、他の種類のプラスチックの偶像がずらりと並んで売りに出ている。つまり庭に飾る矮人の置物だが、それらにはディズニー・ワールドのお化け屋敷からのおどけた怪物も混じっている(ゴットフリート・コルフ)。東欧が物質的にも精神的にも西欧化する動きは疾うに始まっており、たゆみなく進行してもいるのである。

曇りがちな11月初めに溢れるばかりに出現する無趣味なプラスチックの小物類、と簡単に言いかけても差し支えなからうが、これらが無ければ、イギリスの歴史家ロナルド・ハットンの『月の勝利』(1999)も、それに対する『タイムズ』紙の「ハロー・コーン・ドリー」と題した書評<sup>2</sup>もなかったであろう。ハットンはその分野の専門家にして、また新しくあいまいでもある習俗複合の繊細な解釈者である。とりわけ、アングロサクソン地域において数年前から高まってきているフェミニズムの性格を強く帯びた穀粒と月への新しい異教的信奉に取り組んでいる。ハットンによれば、その19世紀に胚胎するこの新興の異教信奉は、イギリスを発祥とする唯一の宗教でもある。それは、イギリスから、ヨーロッパ大陸とアメリカ合衆国へ伝播した。その信奉儀式に〈宗教〉(Religion)の語を当てることには納得しない向きもあるが、著者の切り込み方にはたしかに適切どころがある。ハットンはその信奉の仮面をはぐことに歳月を費やし、〈puzzles in the story〉に取り組む、それを顕微鏡で観察するところまで進んだ。ハットンは読者を、ヴィクトリア朝とフリーメイソンの世界へと誘い出した。フリーメイソン、つまり秘密結社と遍歴者と魔術師

<sup>1</sup> Linda Dégh, *American Folklore and the Mass Media*. Indiana 1994. Chapter 3: Magic as a Mail-Order Commodity. p.54-79.

<sup>2</sup> T.M. Luhrmann, *Hello corn dolly*. The Times Literary Supplement, 15.V. 2000.

たちである。増大しつつある産業集積への人口集中は、その一部を“田園への震いつきたいほどの理想化”へと駆り立てた<sup>3</sup>。ハットンは特に、穀粒と月への信奉づくりに関わる考古学と文献学をまざまざと見せてくれる。それこそ当時の人々に、ロマン主義の光を浴びた冠を紡ぎ出したものでもあった。それらは、田舎の体系秩序が消えゆくなかで、喪失経験を埋め合わせてくれるヴェールでもあった。19世紀から20世紀にかけての時期にはW.B. イエーツ<sup>vii</sup>やD.H. ロレンス<sup>viii</sup>といった代表的な作家たちまでがその趨勢に関わっていたのは、決して不思議ではない。

19世紀初めから、また特に世紀の半ばには、キリスト教の教えの向こうで、自然という女神が次第に力強く立ち現れ、自然宇宙論的な神話に保護の手を差し伸べた。もともと、宗派の枠内では、神話は力を発揮しなかった。そこで宗派とは別に、それは学問と藝術の助けを借りて伸張した。言うなれば〈他者が失敗する場所で〉、白い月光を浴びてたゆたいつつ女神が出現したのである。しかも数え切れないほどの再生産であった。とりわけ1860年頃には、それはすこぶる自意識を帯びたものとなった。

最初の生命は我が水源にて  
 漂い、遊泳す  
 諸々の力我より出でて  
 あるいは救ひ、あるいは滅さん  
 男も女も、獣も鳥も、我より出づ  
 神の存せし前に我はあるなり<sup>4</sup>

儀礼集団、また信奉維持のための奉賛会が形成されるには、それほど時間を要しなかった。しかもそれらは、今日に至るも、なお魔術的・オカルト的な思考という埋め草を取り込んで、それを似非宗教的な世界像へとまとめ上げている。その時代の〈幻想的な絵画〉(fairy paintings)とも似て、穀物の女神は〈十九世紀半ばの諸々の没入観念のスペクタクルのあざやかな証左〉に他ならない。すなわち〈ナショナリズム、古玩趣味、探検、人類学、宗教からの仮面剥奪、そして決定的なのは心霊への傾斜 (Spiritualism) であった〉<sup>5</sup>。

ここはヴィクトリア朝時代の女性像を分類する場所ではないが、新異教信奉の成立は少

<sup>3</sup> Ronald Hutton, *The Triumph of the Moon. A History of Modern Pagan Witchcraft*. Oxford 1999, Chapter 7: Finding a Folklore, p.112-131, here p.117.

<sup>4</sup> 出典, “Hertha”, Sammlung “Songs before Sunrise” by Algernon Charles Swinburne (1867).

<sup>5</sup> Jeremy Maas et. al. (eds), *Victorian Fairy Paintings*. London 1997, p.63.



なくとも部分的にはその種の絵画と関係している<sup>6</sup>。ロナルド・ハットンにとって重要であったのは、19世紀の世俗性の強い感情喚起の生産物という事実であった。しかも、それは歴史的に確認できるものとしてのケルト人の宗教行為とも、キリスト教より前のいずれかの民族とも無縁なのである。もともと、この関係性に誰よりも固執する者がいるとすれば、それはドイツ人であろう。それは歴史的な真実ではなく、むしろ足元が不安定な超越物から成っていてぐらぐらしているがために、却って確かさを得ようとする希求であったと言っても構わない。とりわけ、近代社会における啓蒙と宗教との関係が、それに触れるところがある。しかし学問と科学技術、市場とメディア、政治と藝術などの間の真空においても、そうした似非宗教性を帯びた換骨奪胎が伸張し、またそこから核になる言語表現が発生した。穀物女神もハロウィンも、何よりもロマン主義の息吹を吹き込まれた新異教の信奉であり、在来の宗教語彙を目的に合せて組み合わせたなかから見えてくるのは社会経済的に合理的な構成である。またそれらの諸分野の関わり方を見ると、そこにはたしかに創造神と人間のあいだの西洋的な関係が隠れている。『ファウスト』にはこんな科白がある。〈色とりどりの図柄には明瞭なところがほとんど無い／多くの迷妄とほんのちよっぴりの真実〉。まことに至言である。けばけばしい信奉行為の奥に神学的な世界像がひかえているわけではなく、道徳的・倫理的基盤をまったく欠いた幻影に過ぎない。このクラスのイヴェントは、集団的なペット飼育や遺伝子工学と同じくモダンである。穀物の女神はバービー・ドール<sup>ix</sup>の揺り籠に立っているのもであって、新しい宗教の原点なのではない。コーン・ドーリー (Corn Dolly) としてそれはデヴューを果たし、今日までそうあり続けている。娯楽の一分枝としての姿形であり、その発生の時点からすでにそれに特有の神話に向かって金切り声を立てていた<sup>7</sup>。これが理想化された文化であることは言うまでもない。そこにちよっぴり真実があるとすれば、私たちの現代の病める状況を指し示す何もの

<sup>6</sup> これについては次を参照, Robert Mighall, *A Geographic of Victorian Gothic Fiction. Mapping History's Nightmares*. Oxford 2000.

<sup>7</sup> “Corn Dolly” の概念は多義的である。イギリスには “corn dolly plaitings” の伝統がある。収穫時に作られる藁の作り物や人形で、翌年の豊作を願って家中に吊るす。これ以外にも “corn dollies” は新異教の信奉において儀式性をもつ品物として用いられ、またその種の団体のあいだでは女神そのものとして崇められることもある。もちろんこの語は、1964年に初演されたブロードウェイで初演されたミュージカル「ハロー・ドーリー」であり、当時ルイ・アームストロングが歌ったタイトル・ソングとして知られる。なおミュージカルの元になったのはソントン・ワイルダーの喜劇『結婚仲介人』(Thornton Wilder, *The Matchmaker*) であったが、さらに遡れば、同種の素材は、すでにネストロイ (Johann Nestoy) の作品に見出される。また同じ名称で目出度し目出度しの終わり方をする作品には、1998年にフランクフルト・アム・マインで刊行された医師アッハの『ハロー・ドーリー? クローン人間の作り方』がある。Johann S. Ach, *Hello Dolly? Über das Klonen*. Frankfurt a.M. 1998.

かが、これらの諸現象に潜んでいるからである。

ハロウィンもまた、畢竟、ここで述べたような生成連関にあるもの以外ではない。ハロウィンは民俗でもなく、<sup>フラウホ</sup>信奉でもなく、<sup>クルト</sup>新異教にして世俗の超越物サイクルという冬場のおふぎけのスペクタクルである。しかも沈み込んだ文化<sup>x</sup>に根ざしてもいない。他のスリリングなイベントと一緒にあって作られるサイクルの一コマである (G. コルフ)。

いつの日かタイム・マシーンができるなら、これら諸々の文化を旅するのは、さぞかし甲斐のあることであろう。しかしそれは、人々が立ち働く様子を見るためであって、緑の小枝をいじったり悪い霊から逃げる様子を見るためではない。また人々が私たちと一緒に時間の通路を通して私たちのこの世界へ来ることがあるなら、彼らの方では、ヨーロッパ中に何万という動物の死体の臭気が立ち込め、他方では若者たちがありあらゆる偶像の周りを飛び跳ねているのを目にするようになるだろう。それと共に、私たちがこれらのインチキな模倣品や縁日小屋で射的として並べられる人形をもともと彼らの世界に属するとみなす不遜を侵していることにも気づかずにはいないだろう。実際には、それらの作り物に走る脈絡は、彼らの世界とはまるで別ものである。そこで彼らは問うだろう。私たちが何にとりつかれているのか、と。憑き物の虜になっている私たちとは、そも何ものなのか、と。目下の意味連関では、これは重要な問いである。それに較べると、<sup>キツチュ</sup>俗美と信奉についてその古さや出自やデザインへの疑問は何ほどでもない。

もう一度、ロナルド・ハットンが苦勞して蓋をこじ開けてくれた長持ちへ立ち返ろう。そして中身をハロウィンとも照らし合わせよう。ハロウィンはコーン・ドリー (Corn Dolly) と同様、古箏笛から持ち出したものだった。つまり、最初のモダンのなかでの社会神話のロマンチックな称揚に遡るのである。のみならず、その時期の〈昔話の甘美〉(fairytale sweetness) は、20世紀になってデモーニッシュな変形を遂げたのだった<sup>8</sup>。ハロウィンはまた別の新奇をも映している。それは、個的かつ集合的なアイデンティティと価値の結びつきが喪失の淵に立たされているとの不安であるが、それは、21世紀という第二のモダンに直面した私たちが捉えているサイバー・ワールド<sup>xi</sup>の時代ならではの不安である。しかし第一のモダンと第二のモダンは、いかなる関係にあるのであろうか。

イメージを揃えるために地域を限定するなら、イギリス中部の住民は、魔物を追い払うための品物を彼らの田舎屋の暖炉の中に塗りこめていた。猫が枯死した後の寝床、乾燥した子供靴、中に詰め物をした瓶。イギリスの考古学者ブライアン・ホガードが集めたこれらの品々は、近代初期の人々が、暖かな暖炉を通じて魔物が侵入することに意を用いてい

<sup>8</sup> 参照, Luhrmann, *Hello corn Dolly* (注2)

た証拠に他ならない<sup>9</sup>。またサーク島<sup>xii</sup>では、暖炉を作るに当たっては、外部に石をとりつけていた。それは魔女が腰を下ろして背中を温めることができ、その代わり、家の中へ入り込んで危害を加えるのを免除してくれるというのであった。おそらく、当時、これらの妖怪は人間が極力避けることを願った疫病、飢餓、戦争の擬人化だったのであろう。

では現代の社会は、お守り（材料は別として）を戸口に置くとすれば、何を問題にしているだろう。疫病は？ あるかも知れない！ 飢餓は？ 先ず無いだろう！ 戦争は？ それは最後までは考えたくない！ 過ぎし時代に恐怖への予防としていた儀式に注目するとき、ただちに思い浮かぶのは、疫病、飢餓、戦争の三つ組である。さればこそ、ここではその同じ道を試みに辿ったのである。その脈絡は見まがいが無い。たしかにこれまで閉じられて扉の門をはずす社会的メカニズムが増える一方であり、それと共に私たちの同時代人の頭のなかには諸々の世界が潜在ないしは並行して存在するようになっている。その赴くところ定かならぬ不安となり、それを防ごうとする願望の先に、宗教の錨から引きちぎられた儀式のスペクタクルが生成する。たとえば、戦後の社会秩序のなかである程度まで定着をみた諸々の安定も、過ぎる数十年の間にあらゆる場所で失われた。これは、文化への悲観論的な哀歌でも、沈黙というコンクリートの再現を擁護しているのでもない。これによって、第二次世界大戦後の時期には社会が支柱に載ったのだが、次の世代にとっては思い負荷とならざるを得なかった。しかしまた社会的モデルと道徳的無関心の分裂が結果する潜在的攻撃潜在性を制御するという課題に21世紀の私たちが向き合っていることは見まがうようがない。そうしが潜在性がまとまりとなり、外に向けて暴威に動き出すとき、何が起きるだろうか。

ハロウィンを論じることは、新しい慣習をめぐる一般の諸々の解釈をひとまず無視する用意があるときに始めて意味をもつ。教会が コマーシャリズムの利害によって操縦される場面作りに対抗するために、伝統的な諸々の行事の形態について構成要素を組み替える姿勢にあるかどうかは、総じて重要なことではない。それは、教会の側の戸惑いを示しているのであり、それ以上ではない。より注目すべきは、むしろこの新しい儀式が何のためになるのかとの問いであろう。なぜなら、それは、自足した社会の対立物として自己を明示するからである。大多数にとっては、それはもはや追い求めねばならないものではないかも知れない。しかしどんな火でも、それを弄ぶ者はいる。点火する者もおれば、時には美しく燃えもする。

---

<sup>9</sup> Brian Hoggard, *The Archaeology of Counter-Witchcraft 1700–1950*. (大会での発表記録) *Beyond the Witch Trials. The continuation of witchcraft and magic in European cultures from the eighteenth century onwards*. University of Hertfordshire. Watford Campus, 9. Dec. 2000.

もしハロウィンが〈迷信とたわむれる一夜〉(the night to play with superstition)であるなら、魔術との交流を待っているのはファウストに描かれた成り行きとなるであろうことを想起しなければならない。ファウストはメフィストーフェレスを蠅の神と呼んで、誘惑者、詐欺師を指摘したのではなかったか<sup>xiii</sup>。十一月の最初の夜が開け染める頃立ち現れる者とは、正にそれではなかろうか。

[訳注]

- i p.170 (S.283) 蠅の神 (Fliegengott) : 聖書で言及される悪魔の頭目の呼び名ベルゼブブのドイツ語名。「マタイ伝」12, 24には〈悪魔の頭目の力を借りて悪魔を追い出す〉(小難を除こうとして大難を招くの意) などとして現れる。“Beelzebub” <hebr. Baal-zebulはドイツ語では“Herr der Fliegen”。論者は論考の最後の箇所、特にゲーテを踏まえながら、この名称でハロウィンを喩えている。
- ii p.170 (S.284) ハインツ・ケチャップ (Heinz-Ketchup) の57種の銘柄: ハインツ社はトマト・ケチャップでは世界最大の流通・販売量を誇るほか、ピクルス、ビネガー、ソース、冷凍ポテトなどを広く手がけている。本社はペンシルヴァニア州ピッツバーグ。ドイツ人ヘンリー・ハインツ (Henry John Heinz) が26歳で1869年にシャーパスバーグにマスタド (芥子) の会社を興したのが最初で、やがて共同経営者としてノーブル (L.C. Noble) と組み、またE.ノーブルとの共同会社をHeinz-Noble & Companyとした1872年にピッツバーグへ移った。トマト・ケチャップを手がけたのは1876年であった。同社のキャッチフレーズとして有名な <57 varieties> は1892年であるが、ニューヨークの高級鉄道車両が <25 varieties of shoes> に対応すると宣伝したことにヒントを得たとされる。また5と7は創業者夫妻が好んだ数字の組合せであったとも言われる。
- iii p.170 (S.284) タッパーウェア・パーティー (Tupperware-Parties) : タッパーウェアはアメリカのプラスチック容器メーカー、また同社の製品。タッパーとも略称される。同社は1938年に、ポリエチレンに着目したE.S.タッパー (Earl Silas Tupper 1907-1983) によって設立された。密閉・透明というプラスチックの特質が食器において活用されたが、初期には第二次世界大戦中でもあり軍向けに力が重点が置かれていた。戦後、1946年から大衆向けに販売戦略を転換したが、その成功には営業責任者ブローニー・ワイズ (Bronie Wise 1913-1992) がパーティー用品としての性格を強調し、パーティーの企画を販売と結びつけて、そのための営業人員を育成したことが大きく貢献した。パーティーとプラスチック容器が組み合わせられ、それに高級感を帯びさせる企業戦略は、1958年にワイズが解雇された後も、タッパーウェア社の世界進出とそのイメージに深く関係している。
- iv p.170 (S.284) エイヴォンの相談員 (Avon-Beraterinnen) : エイヴォンは世界有数の化粧品会社“Avon Products”を指す。1886年に28歳の青年デヴィッド・H. マコーネル (David H. MacConnell) によって「カリフォルニア・パフューム・カンパニー」(California Perfume Company) がニューヨーク (Chambers street 126) で設立され、その後、創業者が愛惜してやまなかったシェイクスピアの生れ故郷を流れるエイヴォン川の名前をとって1939年に今日の社名とした。当初は販売員が製品を持ち歩いてしたが、1898年にカタログが作られ、またその頃、最初のエイボン・レディとされるアルビー夫人 (P.E.E. Albee) が加わり、化粧品販売に相談員を組織的に活用する方式への軌道が敷かれた。後、

#### ヨーロッパ諸国のハロウィン (4)

1921年には実物大の写真を掲載したカタログが製作され、女性相談員と相俟ってエイヴォン社の発展に大きな力になった。ここで相談員と訳したのは、いわゆるエイヴォン・レディ (AVON-Ladies) を指す。

- v p.170 (S.284) ベーグル (Bagel[s]) : ドーナツ型の固いロールパン。イースト入りの生地を茹でてから焼いて作られる。
- vi p.170 (S.284) ジャック・オ・ランタン (Jack O'Lantern) : ハロウィンのパンプキンに付会した起源譚。蹄鉄師のジャックが誰にも負けない馬の蹄鉄を打つ代わりに悪魔に魂を売った罰として、永遠にカブラの中をなかをさまようなどとされるが、他のヴァージョンもある。
- vii p.172 (S.285) W.B. イェーツ (William Butler Yeats 1865-1939) : アイルランドの劇作家・詩人。1923年にノーベル文学賞受賞。
- viii p.172 (S.285) D.H. ロレンス (David Herbert Lawrence 1885-1930) : イギリスの小説家・詩人。『息子と恋人』(Sons ad Lovers. 1913), 『チャタレイ夫人の恋人』(Lady Chatterley's Lover. 1928) などがある。
- ix p.173 (S.287) バービー・ドール (Barbiepuppe) : 元は英語の "Barbie Doll" (バービーちゃん), 金髪碧眼のプラスチック人形。
- x p.174 (S.287) 沈み込んだ文化 (versunkene Kultur) : 民俗事象の起源に焦点を当てた議論として、精神的 (多くの場合同時に社会的) 上層で始まった文化形態が、ややあって民間に降下して受容され、何がしかの変化をきたして民俗事象となる、という理論。20世紀前半のドイツ民俗学界で有力な理解であったが、この表現は最終的にハンス・ナウマン (Hans Naumann) が1920年代に提唱した。
- xi p.174 (S.288) : サイバー・ワールド (Cyberworld) : コンピュータによる人工頭脳の世界といった意味。因みに、元の "cybernetics" はアメリカMITのNorbert Wiener が提唱した概念で、生物、機械の両者の制御機構を共通原理として解明する学問。
- xii p.175 (S.288) サーク島 (Sark island) : イギリスのノルマン諸島の小島、フランスのノルマンディー半島南岸に近く位置する。
- xiii p.176 (S.289) ファウストはメフィストーフェレスを蠅の神と呼んだ。: ゲーテ『ファウスト』第一部「書齋の場」にその場面が入っている。

## 会食と混乱と消費：食べる者たちと死者たち<sup>1</sup>

ニコレッタ・ディアジオ (ストラスブール)

[原タイトル] Nicoletta Diasio (Strasbourg), *Communion, confusion, consommation: de la gourmandise et des morts.*

ストラスブール、2000年10月31日、3人の少年が私の住まいの戸を叩いた。菓子、あるいはその類のものをねだりに来たのである。不親切な文化人類学者である私にはその用意が無かった。一つかみほどのアーモンドが、3つの派手な仮面に私が呉れてやる事ができた全てであった。翌日、私は、町の中心部にある菓子店へ行って、頭蓋骨や蜘蛛や蛇の形につくられた砂糖菓子や果物ゼリーをあつらえた。店の売り子の女性は先端の尖がった頭巾をかぶって、パンフレットを配ってくれたが、それには祭りがケトルの起源であるとの解説が載っていた。夜、私は待機して窓の外をうかがった。獲物はテーブルの上に乗せておいたが、誰もやって来なかった。私は少々淋しい気持になり、戦利品にしてやるべきものを口に運んだ。誤認に気づいたのは、この出来事を考え直した後だった。文化人類学を読みながらも、私の感情は、灯りをともしたカボチャと仮面の子供たちが点滅するアメリカ映画に向っていた。グローバリゼーションに抗して再発明された山盛りのアイデンティティのなかではネオケルトの修辞がもはや無視できないにも拘らず、そして最後に、食べ物や行進や衣装やメーキャップや〈ハロウィン〉のダンスに誘う宣伝広告にも拘らず、グレコ・ローマンの伝統によるカトリック教会文化のなかで鍛えられた私の心は、それを、11月1日と2日の間に起きる死者たちの〈本当の〉集いと同一視することを続けていたのだった。

この単純な誤認が物語るのは、修得した知識と、身体とアクションに記憶が刻み込まれたものとしての行為とのあいだの落差である (M.P. Julien/J.,P. Warnier, 1999)。それはまた、ローカルな伝統に、輸入された祭りが重なり、そこに北米の消費者の行為も付随するという構造的なシステムをも示している。そうした分節の力は、それが無意識であるという性格に存する。言い換えれば、ルーツとルート (racines et trajets/roots and routes, J. Clifford, 1997) の対比を繰り返すなら、特定の経路が〈功を奏している〉ように思われるが、その際、これらが何よりもローカルな文化のモデルに根を下ろしている以上、かかるビジネス的な言い方の可否はどちらでもよいであろう。グローバリゼーションは、(マーケットを媒介にして) 正統性への安全装置のように機能しているのであり、決して実証主義的思考によって残存物の大きな貯蔵池ののなかに押しつけられた信仰の一つなどではな

い。システムのなかのこのずれは、私にとっては、興味深い観点を指し示す。それは、フランスの場合構造主義と相対主義のあいだの煮え切らない緊張を超えて、消費と社会の再神聖化が必ずしも矛盾した現象ではない所以を示唆するであろう。

<新しい> 祭り<sup>ii</sup>が成功するのは、決してマーケットの操作だけではない。マーケティングの専門家が知っているように、新製品の売り込みは常に危険な企てであり、成功が予め決まっているわけではない。<マーケット> という言い方自体が人類学による漠然とした記述的観念であり、実際には複合的な現象である。例えば、それは、消費者のさまざまな隙間の分析的な定義の所産であり得、新製品の成功あるいは失敗を理解する試みは困難でもある。他面では、消費をめぐる人類学の難問の一つは、外部で決定された戦術を裏づけ、保証し、あるいは正当化することが時に要求される点にあり、そうしたところでは、エスノロジーの調査そのものが、合理的かつ理想的な社会の担保や仕組みのように機能する。その結果はアイデンティティ的な構成と主観化の形式の複合となるが故に (J.P. Warnier, 1994; 1999), 社会の分析となるためには、その所産は単純なマーケット機能を超えることになる (M. Douglas/B. Isherwood, 1979; D. Desjeux, 1997)。

ハロウィンの力、またその広がりを見ると、それが融合の類型であることは明らかであろう。第一に、ケルトのアニミズム、グレコ・ローマンの異教性、カトリック教会、プロテスタント教会といった宗教的な交雑の産物である。二つ目に、その祭りは、死者と生者のあいだの関係を支配する一般的な構造とローカルな文脈のあいだの規律とそのヴァリエーションの遊びであることが分かる。その点では、ヨーロッパにおいて比較研究に携る者には好都合な観測台である。そこではまた最後に、マーケットと祭礼が結びあわせられる。消費の生産物の大量投入も、再神聖化と神話化の進展と切り離すことができない。物象と観念が行き交い、祭礼の再活性化を促すが、その演じられ方 (performed) は独自であり、コンテキストの特殊な活用に従っている。以下の報告は、死者の複合的な仕組みに関する試みである。すなわち、アングロサクソンの祭りであるハロウィンとシチリア島の死者の祭りのあいだの一致と差異を明らかにし、また砂糖菓子の儀式的な費消に向かう遊びの特殊な役割を分析しようと思う。

### 死者の会食、生者の採めごと

聖なる友たちよ、聖なる友たちよ  
俺は魂、お前たちは別の生きもの  
俺がこの悪しき世界に生きるように

〈死者の品〉の贈り物をたくさん俺においてくれ

—死者の夜のシチリア島の子供たちの祈り

歴史家 J.M. モシェーヌ (1694 リューベック生—1755 ゲッティンゲン死) の『古代・近代教会史』第4巻の記すところによれば、998年にクリュニー修道院長オディロ<sup>iii</sup>は、ドルイド教の死者信奉とキリスト者として物故した人々への祭儀を合体し、また〈この新しい制度をシチリアにやってきた隠棲者のために創出すること〉を促した。その隠棲者は〈啓示を得たが、それによればクリュニーの修道士たちの祈りは煉獄にいる魂を自由にする上で特別の効果を発揮する〉とされた<sup>1</sup>。宗教現象学、構造主義、それに宗教・シンボル人類学が呈示したのは、キリスト教の祭りを、近似する異教の信奉に接続する可能性を説く統合のシステムであった (参照, E.De. Martino, 1975; M. Eliade, 1949; V. Lanternari, 1983; G. Van der Leeuw, 1957)。とりわけ、クリスマスの祭りと子供たちにプレゼントを携え来る風習と死者信奉のあいだの密接な関係を明らかにしたのは、サンタクロースに関するレヴィ=ストロースの論文 (1952) であった。それは一つのシステムであり、そのなかで死者への供物が子供たちへの授け物に転移する。子供の位置は、境界的な性格にある他の半端な者たち、よそ者、女性、奴隷の位置とも重なるが、そうした存在としての子供への施しのなかで、生者の世界と逝去者の世界が橋渡しされると言う。類似した仕組みにおいて生者と死者のあいだのさらに幅広い交流を具現するのは世代間の折り合いであり、それが、死者をして新たな生命を得てこの世に一時的に闖入することをなさしめる。このモデルは、古代ローマのサトゥルヌス祭<sup>iv</sup>におけるように、農業と年間推移と儀式的のサイクルをつなぐ幾つかの祭りに共通でもある (A. Di Nola, 1995)。すなわち、ハロウィン、万聖説<sup>v</sup>、サン・マルタン<sup>vi</sup>、サンタ・クロス<sup>vii</sup>、サント・ルーシ<sup>viii</sup>、クリスマス、ベファナの祭り<sup>2</sup>である。

第二の要素として、モシェーヌが記述するエピソードから特殊な事例が浮かび上がる。シチリアとの絆である。そこでは伝統的に、死者の祭りは、聖なる魂をめぐるカトリック教会の信奉と地中海の諸々の信奉を重ねあわせることによって、ハロウィンの儀式との強

<sup>1</sup> モシェーヌ (Mochein) の引用は次による。In: Archivio per le Tradizioni Popolari. 1907, vol. XXIII, p.508.

<sup>2</sup> “la fête de la *Befana*” : “Befana” はプロップ (Propp) が記述した “Baba Yaga” と通じる場所がある古い存在である ([訳注] バーバー・ヤガはロシアの俗信で、鶏の脚をもつ小屋に住み、空を飛ぶ老婆)。イタリアの広い地域に分布している伝統によれば、それは御公現 (l’Epiphania 1月6日) の夜、家々をおとずれて、親切な者たちにはボンボンや菓子で報い、意地悪な者に罰としては炭をあたえる。



い親近性を示してきた。シチリアの伝統では、菓子類や玩具のプレゼントが11月2日に子供たちに授けられるが、それは死せる両親の魂のためである<sup>3</sup>。〈偶々11月2日〉なのではなく、その日に、〈死者たち、すなわち聖なる魂が帰ってくる〉のである。偉大なフォークロリストにして人類学者であったジュゼッペ・ピトレは1881年にこう記した。

子供たちにとって、死者は守護者である。11月1日から2日にかけての夜、死者たちは恐ろしい棲家を去って、小さな集団をつくり、あるいは単独で町へ降りてくる。そして、その年に賢明だった子供たちや、死者のために深く祈り彼らのために何かを断った親たちの子供に、たくさんのケーキ、品物、衣装、菓子、おもちゃをあたえようとして飛来する。……街の悪ガキたち (Les monelli) が、往来で、悲しくも長く引いた声で叫んでいる。〈死者たちがやってくる、お前の足を引っ掻くぞ……〉。<sup>4</sup>

この一節は、他の証人によっても繰り返されると共に確かめられてもおり (A. Lancellotti, 1951; A. Buttina, 1971; A. Di Leo, 1997), ハロウィンの祭りとの近似性と差異について諸要素を示すものとなっている。先ず、死せる霊たちが、生きている者の世界に入り込む。通俗的な書き物のなかでは、お利口な子供たちに菓子を持ってくる死者の群れは、部分的には、ハロウィンのイコノグラフィーと重なっている。白い毛織物と絹の沓は、素足で足音を立てないためであり、靴底をこする靴拭いだけを携えているのは、聞き分けのない子供の足をひっかくためである。そして細い頸の上に大きな頭蓋骨が載っている。あるいは、死者は手で頭を抱えている (cf. 聖レミ<sup>ix</sup>)。なお死者の列については、厳格な序列が存在する。第一に位置するのは、自然な死に方をした死者、次に法による死者、その次が病気の死者、最後に突然死の死者である。良き死と悪しき死をめぐるキリスト教のイデオロギーが反映されているわけである (A. Di Nola, 1995, p.70 seq.)。言い換えれば、生者たちと契約を結ぶことになる第一のグループは、逝去にむけて準備をした人々で、それゆえ生者と対面するといっても、彼らは大きな距離をおいた位置に存する。反対に、この世と接続していることは〈障碍である〉 (Pitré, 1881)。モシェーナの伝える隠棲者

<sup>3</sup> 1971年にブッティッタ (A. Buttitta) の報告するところによれば、シチリア島人の9割がこのベファナの習俗を行っており、その他の人々はクリスマスの習俗、すなわち “Vecchia Strina” (フランス語では “la vieille de Noël” クリスマスの老婆) で、これは1月1日にプレゼントを持ってくるが、またベファナでも繰り返される。現実には、死者の祭りは、クリスマスによって大きく取って代わられ、その時にプレゼントが与えられる。また墓参り、物故者の家族の再会、さらにとりわけ菓子類を配ることも続いている。

<sup>4</sup> 原語は, “li morti vennu et li grattannu li pedi! ...”.

が説明するように、煉獄にある魂たちのために祈ることがもとめられる。すなわち、これらの困窮した者たちは、聖なる魂すなわち良き霊へと変えてもらう必要性へとうながす<sup>5</sup>。もっとも、ハロウィンとの関係のためには、そもそも仮面扮装とその夕べや行列やふざげや恐怖を呼び起こすとされるものに具体化される怖しい予備段階が欠けている。〈恐ろしい住まい〉から呼び出すにも拘らず、死者たちはその行動において恐怖ではない。これらは、それと分かる近しい存在であり、結びの糸を再び織ろうとする家族のメンバー、すなわち祖先である。伝説は、死者たちの夜、一人の子供がエリス山の下でそのいなくなった父親をさがすために出発して、改めて抱きしめることができる様子を伝えている。万聖節の夕べ、家では、家族の思い出の保管者である女たちが（女性たちこそ卓越した仲介者だが）、物語や逸話と共に、逝いた人々の記憶に再び活力をあたえる。先に引用した祈りにおいて、この逆転は模範的である。波乱と危険と不幸の世界で、孤独な子供が投げおかれる場所、それは物故者たちの熱い共同体とともにあること以外ではない。贈り物、詩句では〈死者の品〉だが、それは不幸と忘却の空間のなかで、嘗てありし人々を永えにするための聖物にほかならない。

上記の記述の第二のテーマは、良きものを再分配する原理である。それは、逝きし者たちに、大人流の儀式的な乱行を課す。もちろん子供たちに良かれとしてであるが、それはまた大人と子供が運命を前にして菓子類を交換に出すアングロサクソンの祭りにおける〈世代のあいだの闘い〉を先取りしてもいる。シチリアの祭りでは、このやりとりはそれほど直接的ではない。子供たちは、仮面を通じて死を具体的に再現するのではなく、〈貧民がそうであるのと同じく、逝いた霊の正当性を表現する〉（A. De Gubernatis, 1873, p. 109）。交換のテーマは、何かを集めるテーマより重要性をもち、むしろクリスマスのテーマである儀式に接近する。子供たちは、寝る前に古い靴を窓の前に置く。そして目覚めと共に、靴がボンボンやおもちゃでいっぱいになっているのを見出す。ヴァリエーションの一つによると、家の隅に古いぼろ靴を置いておくと、それが甘いものでいっぱいの靴に変っているのを子供たちは見つける。屢、両親は、目立つ場所に、壊れた玩具や野菜や3束のニンニクを置いておく。それは、子供たちが先ず（聞き分けの悪い子供の場合だが）がっかりし、次いで〈死者の品〉を探しに出かけるためである。

年齢集団の間の悪化した敵対が支配的となり、より大きな結束が損傷をこうむるところでは、（レヴィ＝ストロースがクリスマス祭において同一視した二つの性格を繰り返すなら）、アングロサクソンの儀式を欠いてはいるものの、良き導きの準備期間というカトリッ

<sup>5</sup> 煉獄 (Purgatoire) とキリスト教前の死後のあり方の間の連続については次を参照, Le Goff, L'invention du Purgatoire. Paris [Gallimard] 1991.

ク的な次元がみとめられる。

大人と子供の儀式化された暴力は第三のエLEMENTにおいて浮かび上がる。死者の行動の“monelli”<sup>x</sup> すなわち街の悪ガキたちへの転移である。それも往来に混乱を起こし、自己と対照的な社会の上層のクラスに恐怖をあたえ、家々をめぐって甘いもの (panuzzi dei morti, 死者のための小さなパン)<sup>xi</sup> を乞い、ささやかな蛮行の仕草をし、叫び、吼え、ありあわせの器具 (鐘、フライパン、トランペット等々) を何でもつかって騒ぎ立てながらである。私たちは、社会的と世代間の二つの対立を前にするが、それはヨーロッパでのハロウィンの回帰を特徴づけるものと類似の構造をもって響いている。祭りの成功は、また世代的な新しい葛藤のコンテクストのなかでも読みとることができよう。青少年期の引き延ばし、労働世界への遅い同化と結びついた意識の起伏、待機装置 (イタリアでは parking と言われる) の頻出、これらを含むエポックにあつて、この儀式は、年齢集団、また社会体にさまざまに組み込まれた若者グループの志向をのせるコンテナやドラマの枠やシンボリックなオペレーターのように機能する。周辺者、第二あるいは第三世代の移民、都市の広大な周辺部の住民、これらは、今日の構造無きコミュニティのなかでどうあるのか (V. Turner, 1969), また社会的な差異というリスクのなか (P. Tenoudji, à paraître), さらに儀式のこの類型において、バフチーンによって分析されたカーニヴァル・モデルの倒置の構造を見出し<sup>xii</sup>, あるいはまたデ・マルティエーノが歴史的現存の壊れ易さと規定するものをめぐる贖罪の形態を見出しつつ: すなわち <個々の存在それ自身が、何らかの文化的行動の可能性そのものを関する否定において、決定・選択・破滅の中心者の資格としては失われる危険> である (E. de Martino, 1963: p.103)<sup>6</sup>。

他面では、死が想起される瞬間、社会がスキャンダルを制御できるために、死は具体的なものとならなければならない。多かれ少なかれ未来が近いなか、ハロウィンの祭りは<派生的な> 暴力に参画することも排除され得ない。おねだりをする子供たちを毒殺するためにシアン化合物入りの、あるいはヘロイン入りのボンボンが使われるという噂が走ったのは1970年代のことであった。また注射器や剃刀の刃やその他の暴力 (窓を壊したり、物を投げたり、汚物を撒き散らしたり、火をつけたといったもの)、口づてにせよ行為にせよ、継続性と遡及力を帯びた過程のなかで強まってゆく (L. Degh, A. Vaszonyi, 1981)。さらに、年齢集団間の攻撃性の儀式化は、反省の他の大きな軌道を切り開く。祭りのなか

6 この他、「ラジオ・ヨーロッパ」で2001年に放送されたインタビューがある (radio d'Europe 1. le 30 avril 2001 vers 16h30)。インタビューを受けた一人のアルジェリア系フランス人は、ハロウィンに対抗するカトリック教会の最近の動きに言及した。彼は、11月2日に祖先への畏敬を寄せることがまったく不可能であることに触れ、また死者を想起する上でずっと平等主義で<たのしい> ものとしてアングロサクソンの祭儀 (rite) を取り入れていると語った。

の暴力の役割と、結束を飾るために必要なその役割の歪曲である。行為が談話になることができるなら、また談話が行為において強まるなら、具体的な聖物と破壊的な実践は（筆者はここでは、サン・シルヴェストルの夜<sup>xiii</sup>にストラスブルで車が焼かれることを念頭においている）、ますますドラマティックな性格を強めつつ、年間曆上の儀礼を伴うことになる。またそのときには、社会的かつ境界的なグループが、この世界への死の闖入と、シンボリックに嘲弄されたエネルギーが爆発する様を演じるのである。

### 死者への供食：消費と儀式のあいだにある砂糖菓子

破壊的なものにおける実際の一つは、食物のタイプである。作られ交換される食物の形とその儀式的な消滅と、それは直接的に結びついている。シチリアの死者祭礼を特色づけるものである信心の性格にあるパンや菓子は多い。1976年にウッチェッロは、渦巻きパンや人形の形のパン（pupide di pane）を焼く実例を紹介した。人形の場合は顔や足に十字架の印がつくのである。家族が追憶する死者の一人一人のために、そうしたパンが一つづつ貧民に供される。さらに、こうした食べ物をもらう非常に貧窮した人々に加えて、受け手には子供たちもいて、人間の形やその他の姿焼きとしてヴァラエティに富んだものを供される。それらのなかで第一に来るのは、子供たちへのプレゼントとして確実に頻繁なモデルで、“pupi ri zuccuru”，“pupi a cena”，“pupaccena”<sup>xiv</sup> などと呼ばれる<sup>7</sup>。小さな凶像の菓子で、伝統的にポピュラーなイメージとなっている神話の登場者や、騎士や結婚衣装を着けたカップルがあり、また大衆文化のヒーローであるミッキーやバットマンやダフィー・ダックも見受けられる。これらの“pui”は、菓子屋あるいは街頭で売られている。白い旗で覆ったバラックには多様なタイプの“pupi”が並んでいる。その他、“favette”（ソラマメの砂糖漬け）とパスタフォルテによる“os des morts”（死者の骨：小麦粉と砂糖で、砂糖が＜強い＞の要素）も用意される。脛骨、骸骨、幼子イエス、果物、太陽、月といった形である。こうした＜骨＞は、冬至とキリスト教の儀礼を結び合わせる他の機縁でも用意される。つまり、サン・マルタン、無原罪の御やどり<sup>xv</sup>、サント・ルーシ、クリスマスである。これらもまた街頭において準備され、売られ、消費される。すなわち＜ヌガーのスタンド＞（turrinari）であり、農民の祭りには＜聖店＞（sagre：祭りの店）になるが、そこ

<sup>7</sup> Uccello 1976; “pupo”は“poupée”（小さな人形）を指す。すなわち女兒のための操り人形（pantin）や金属性のマリオンネット（糸操り人形）であり、シチリアの“pupi”にはシャルルマーニュとその騎士たちの仕草を表すものがある。ここで言う＜人形たち＞（pupi）は砂糖でつくられており（ri succuru）、ホストの資格で家族の夕食（pupaccena）に参加する。

では多種多様な <ヌガー> (torrone)<sup>xvi</sup> が扱われる。同じく、小麦と蜂蜜をベースにして抽象的な形のものとして“pasti ri meli”がある。二重渦巻きあるいは単純なS状で、サント・ルーシのための供物であるが、また陶器にも、さらに新石器時代の彫刻にもみられ、豊穡と関連して屢々見られる (Museo delle Arti Tradizioni Popolari, 1984)。甘い食べ物として行なわれているものとしては、他には“frutta martorana”<sup>xvii</sup> があるが、これは古い時代に遡るパテで (14世紀)、アーモンド、砂糖、レモン、ヴァニラをベースにして果物の形につくり、手で彩色をほどこしている。一部で工業的に作られるようになったこともあって、スタイルと技法は変化したが、砂糖が祭りに因んだ価値をもち、姿形に作る事が重要であることはなお残っている。もしサンタクロースが <聖なる生き物> に取って代わって <子供への贈り手> を果たし、生者と死者の密接な交流においてなされていた騒擾が消え、貧民が忘れられ、授け物が12月25日にずらされたとき、なお残っているのは、砂糖で丹念につくって形にしたデコレーションでもあり、しかし溶けやすい菓子類である。因みに、死者の祭りへの記憶として、サルヴァートル (37歳) は次のように語ってくれた。

それは本当に素晴らしい。決して、朝、プレゼントや菓子を見つけるからだけではない。その後は、人でいっぱいの墓地へ行く。黒い装束の女性たちと一緒にいる。彼女らは、泣いたり、叫んだりする。それは、最近亡くなった者たちに対してだけでなく、昔の親族にも向けられる。最後に、涙をいっぱいためながら帰宅すると、豪華な昼食が待っている。そこで食されるもの全部はどうも語りきれない。それから、毎度のことだが、私と姉とのあいだで議論になる。甘い <プッピ> をどうするのか。彼女は食べようとするが、私は、それが余りに綺麗なので残しておきたいのだ。今でも思い出すが、一度、私たちに供されたのが高さ40cmの騎士だったことがあって、そのときはすぐに食べないでいることに成功した。そして私たちは眺めていた。ところが、数日後、割ってみると、中は蟻でいっぱいだった。何たる幻滅!

<死者を養う>、祭りの菓子を食べるために言われるのがこれである。推移を含む物食い、すなわち死者たちは食し、かつ食される。これらの祭儀を貫くのは葬儀の宴席のテーマである。上記の証言にある家族による盛大な会食、しかし同時にテーブルの上の何がしかを置いておく習慣でもある。それは、逝去した友たちが到来するや、食べものによって力をつけるためである<sup>8</sup>。死者たちのシンボリックな欲求は、生きる者の世界の流儀で形になる。

<sup>8</sup> 参照、聖ニコラウス (Saint Nicolas)、サンタクロース (Le Père Noël)、ベファナ、これらはいずれも授け物を持参者である。これらにめぐっては、前夜、少量のパンあるいはスープ、あるいは夕食の一部を出しておくが、それはこれらが途上で食事をし、迎える側に対して準備をするためである。

逝去した者への供物は、諸文化を横切っておこなわれる行為であり、食べること、狂舞、有り余れるものを見せびらかすこと、これらは祭礼の経済に必要な諸要素を構成する。古代ギリシア・ローマの灌奠<sup>xviii</sup>は、キリスト教の到来によっても消滅しなかった。聖アムブロシウス<sup>xix</sup>は、キリスト者に対して、死者の墓上での饗宴を行なわないことを指示しなければならなかった (A. Buttitta, 1971)。“cunsulu”とはシチリアでの慰謝であり、衰弱した集団に再度活力をあたえ、逝去者の友たちエネルギーと存在を転移させる最初期のキリスト者たちの“refrigerium” (リフレッシュのための儀礼) から着想された宴であった<sup>9</sup>。貧民への振る舞いは、あの世の代表者たちに向けて、＜飽食と食不足のあいだの構造的な差異をひととき掻き乱す＞食物の再配分へと延びてゆく (P.G. Salinas, 1981: 239)。

死者たちは、愛し、憎み、やさしくしてくれる親族のところに住むのと同じく、食べることもする。また彼らを忘れた者に対してはその足を引っかき、彼らを愛する者には、その夢に現れて慰めとなる。彼らはまた、菓子という脆い形を通じて食べられもする。“Pupi” (人形パン)、死者の骨、甘味をつけたソラマメ、これらは二重の贈与となる。すなわち、子供たちと貧民に行なわれる贈与を通じた死者の友たちへの供物であり、また人の形の菓子をたらふく食べることによって故人たちが自己自身を費消するところでは＜シンボリックな保護の食＞でもある (A. Buttitta, 1971; 1995)。このテーマは、幾種類もの葬儀において、ソラマメ (féve) の存在と再び結びついている。古代ギリシア世界では、ソラマメは不純な植物であり死者に向けられた食品とみなされた。ソラマメの白い花に黒い染みがあるのは、死者が足跡をつけたのである。ソラマメを食べるのは、自己の両親の頭を食べるのと等しかった。プリニウス<sup>xx</sup>によれば、ソラマメには死者の友たちがみとめられるのであり (Naturalis Historia, XVIII), オウィディウス<sup>xxi</sup> が記すところでも、＜死霊を祀る＞<sup>xxii</sup> に際して、家族の父親はソラマメを贈物とした後、夜中にそのソラマメを投げて死霊を遠ざけた (D. Dumezil, 1974: 372-373)。聖オディロは、11月2日に信仰深い逝去者のために祈ることをクリュニーの修道士たちに定めて、その祭礼に先立つ8日間にはソラマメを食べることを命じている (A. Uccello, 1976)。ソラマメを象った菓子は、後の世紀にも、ローマやウンブリアやシチリアやカムパーニュにおいて食され (R. Peyrefitte, 1954: 170)、またスープにもなる他、かつてオディロが定めた時節にはイタリア各地 (マ

<sup>9</sup> 南イタリアの多くの地域では、宴席の準備のセレモニアルは近親の死に続いて行なわれる。死者の親類たちは＜ガスの火をつけない＞。例外は、物故者を見舞い客に出すコーヒーあるいは熱い飲み物だけである。その後、本当の宴が、隣人に向けて、次いで遠方の親戚あるいは親族にむけて、と順番に用意される。

ルケ、アブルッツォ、シチリア)で貧民に分け与えられていた<sup>10</sup>。死者に食させる行為は、種々の天地開闢伝説において人間によって自己を養わせる神々と照応してもいる (M. Bacchiega, 1982; C. Levi-Strauss, 1964, E. De Martino, 1975)。それは、食べられるために作られるパンによる人の形の無数の偶像においてもそうである。聖テリジオ (Sant' Eligio 588–659)<sup>xxiii</sup> はパンで作った女性を象ったパテに触れて、それが新年の期間に用いられると語っている。同じく743年の「迷信一覧」<sup>xxiv</sup> も、その独特の調子で〈小麦の偶像を撒くこと〉を取り上げており、さらに別の箇所では、パンの偶像がパンの儀礼と類似することにふれている。その儀礼とは、フレイザーによれば古代ローマ人が“maniae”と呼び、また死者の祭りの“pupa”において見出されるものに他ならない。

騎士<sup>パラダン</sup>、人形、団体のヒーロー、頭蓋骨、骸骨、馬、皇帝、これはポピュラーにして子供たちの想像世界の神話の登場者であり、もう一つの世界の偶像である。それらが、死者が人間を食べ、人間が死者を食べるシステムとなるとき、〈宇宙が現存し、それが細かく割られ、齧られる〉 (A. Bacchiega, 1982: p.104)。食用の人形は少しづつ食べられ、消費され、砕かれながら、“trick or treat”の対象あるいはシチリアの御祝儀の本質的な意味は甘さと脆さにあることを分らせる。砂糖菓子の騎士において見られたように、すぐに食べることを優先させる人、味を喜びながら形を壊してしまう人、〈あまり綺麗なので〉取っ取っておこうとする人というように、それは家族のなかでの交渉の対象である。さらに、虫に食われ、暑熱に遭い、損傷を受けることなどによって、このミニアチュアの世界は変えられる<sup>11</sup>。しかし、費消が形態の恒常性に儀式的に挑戦するところでは、齧ったり遊んだりするのは、破壊の別の形、しかもより意識的でアクティブな形を指し示している。フランツェスコ・ファエタの論証によると、儀式的物体を分析すると、現存とは重要な階梯であ

<sup>10</sup> ソラマメはフランスの伝統のなかでは、いわゆる〈王様のケーキ〉 (“la galette des Rois”) において見出される。アーモンド、バター、小麦粉、卵で作られ、公現祭 (l'Épiphanie) の食物である。中には小さな作り物が入っており、人の形であることも多く、ソラマメ (la fève) と呼ばれる。一人の小さな児童が、中を見ずに、この菓子を一片づつ配り、自分の配分のなかにそれを見つけた者が祭りの王様になる。一日だけの王様というカーニヴァルで見られる型、また死者と子供の領域との接続は、境界回転のシステムであり、ここで記した儀式によって構造的な転倒があることが示されよう。

<sup>11</sup> この世のミニアチュアにおいて忘れてはならないのは、遊びの側面があることと、人の形の菓子というイミテーションには大人の生き方を儀式的に訓練する意味があることである。サン・ジョヴァンニ (San Giovanni [訳注] 洗礼者ヨハネのイタリア語表記で例祭は6月24日) の祭りの場合にも姿焼きの甘いパテが洗礼され、両親自身の子供と代父母の子供たちが (大人にとっては余り重要ではないことだが) 親戚ごっこに興じる。なお付言すべきこととして、この洗礼者ヨハネの祭りの終わりにも、やはり会食がなされ、そのとき子供たちには菓子類と焼いたソラマメが与えられる。参照、A. Di. Nola, 1991: p.46.

ると共にその費消であり消耗である。ファエタは、カラブリアの〈マスタッチョーロ〉(mostacciolo 菓子)<sup>12</sup>に関して、食べるための小像が、子供の立場から、この世を文化的に創り出すことをなさしめるものである様子を論じている。工藝性を帯びて成型された後、〈マスタッチョーロ〉の運命は〈破られ、変形され、口に含まれる〉。すなわち〈驚は、与えられた遊びのなかでは本質的な形態ではなく鳩にもなる。雌の騾馬は馬になり、駱駝は瘤を失いかねず、雌牛は頭が2つも付く。ビスケットは脆さによって、破損と変形の遊びに褶伏する……この世界の獲得は、図形に仮託して、すなわちその破損を通してのみ行なわれるのではなく、その否定によってもなされる〉(F. Faeta, 2000: p.211)。この世の形成と破損のこの作業に砂糖が関わるのは偶然ではない。この世界の喜びの絆のために天使と悪魔が代わる代わる現れるのである(Fischler 1993: p.275)。医薬、香辛料、栄養剤、非本質的な姿かたち、あるいは生理学的に必須のもの、現存という可塑性が、形の洗練された、しかし脆い細工物と重なってゆく。私たちの現存とは、形態がありながら、それが常に溶解を前にしている場所に他ならない。

このパースペクティヴに立つとき、審美的にして果かない行為は、次の諸点を同時に意味していよう。

- 死に拠って立つ聖物という形、美のポトラッチュ、しかもそれは、作品は洗練され複合化され、儀式的機能へとかさなってゆく場所である。
- 生ある者たちと死せる者たちの費消を通じた共同体、それは聖餐のすがたである。
- 死が威嚇的に現存するという具体的な兆表：破壊と組になった費消、似姿は自ら歪み、壊れ、溶け、そして消えてゆく。
- しかしそれは自己破壊の可能性でもある。それももう一つの世界、別の規則、異なった姿形の呑み込みを通じた自己破壊である。

〈生きる者によって作られ、生者が喜ぶものでもあるプレゼントが、滞在することによって受け手と認められた死者にわたされる。その死者は、他の種類の葬儀である火葬によって毀たれる死者とも接近する〉(M. Mauss, Oeuvres, 3, 1968: p.33)。儀礼の構造が特殊化と細分化の過程の上に成り立つとすれば、姿焼きの菓子が暗示するのは、溶解し、屢々不可視に近づいて、祭りと崩壊と、そこに不法と冷淡が合流する〈分水流〉への流

---

<sup>12</sup> 小麦粉と蜂蜜を素に人の手で精巧に形作られたビスケット、そして買って来た銀紙を使ったデコレーション、それは奉納品の趣を帯びて、子供に向けられたり婚約者のあいだで渡され、やがて教会の祭日あるいは守護聖者の日に食べる。



れ込む様相である (M. Douglas, 1971)。詳しく言うなら、そこで表現されるのは、この世の脆さである。そのすべての開示、すなわち鋳直しの可能性、姿焼きの菓子のかたちにおける果無さ、燃え縮んでゆく蠟燭、片面クレープ<sup>xv</sup>の模様となったコスチューム、これらは儀式を構成するエレメントである。形あることによる破損性と、ありとあらゆる形を含む宇宙の不壊性のあいだを戯れる寓意をもそれは示すことができる。消費と聖性と見栄が混ざり合い、購買と経済競争が良き下支えとなって、古くかつ新しい祭りに力をあたえ、さらに再び活力あらしめるのである。

### 参考文献：

- P. Apolito, *Il tramonto del totem. Osservazioni per un'etnografia delle feste*. Milano 1993.  
Archivio per le Tradizioni Popolari, XXIII, 1907.  
Bacchiega, M. *Il pasto sacro*. Foggia 1982.  
Bachtin, M., *L'opera di Rabelais e la cultura popolare. Riso, carnevale e festa nella tradizione medievale e rinascimentale*, tr.it. Torino 1979.  
Benveniste, E., *Vocabulaire des institutions indoeuropéennes*, vol.1-2. Paris 1969.  
Butera, »*La Strina, ossia la festa dei regali in Vicari*«, Archivio per le Tradizioni Popolari. 1907, XXIII, p.126-127.  
Butitta, A, »*La Festa dei Morti in Sicilia*«. In: Ideologie e Folklore. Palermo 1971, p.46-62.  
Butitta, A., "Ritorno dei morti e rifondazione della vita". In: Lévi-Strauss, Babbo Natale giustiziato. Palermo, p.9-42.  
Carpitella, D. (dir.), *Folklore e analisi differenziale di cultura*. Roma 1976.  
Clifford, J., *Routes. Travel and translation in the Late Twentieth Century*. Cambridge 1997.  
Dégh, L., Vaszonyi, »*La parola cane morde ? Dall'azione alla leggenda*«. In C. Bianco/M. Del Ninno (a cura di), *Festa. Antropologia e semiotica*. Firenze 1981, p.58-71.  
De Gubernatis, *Storia comparata degli usi funebri in Italia e presso gli altripopoli indoeuropei*. Milano 1873.  
De Gubernatis, *Storia comparata degli usi natalizi in Italia e presso gli altri popoli indoeuropei*. Milano 1878.  
De Martino, E., *Morte e pianto rituale. Das lamento funebre antico al pianto di Maria*. Torino 1975.  
De Martino, E., *Sud e magia (1959)*, tr.fr. *Italie du Sud et Magie*. Paris 1963.  
Desjeux, D., »*L'ethnomarkeging, une approche anthropologique de la consommation : entre fertilisation croisée et purification scientifique*«. UTINAM, 1997, p.21, 111-147.  
Di Leo, M.A., *Feste popolari in Sicilia*. Roma 1997.  
Di Nora, A., *La festa e il babino*. Torino 1991.  
Di Nora, A., *La nera Signora. Antropologia della morte*. Roma 1995.  
Douglas, M., *Purity and Danger. An analysis of concepts of Pollution an Taboo*. Harmondsworth

1970.

- Douglas, M./Isherwood, B., *The World of Goods*. New York 1979.
- Dumézil, G. *La religion romaine archaïque*. Paris 1974.
- Eliade, M. *Traité d'histoire des religions*. Paris 1949.
- Faeta, F., *Il santo e L'aquilone. Per un'antropologia dell'immaginario popolare nel secolo XX*. Palermo 2000.
- Fischler, C., *L'omnivore*. Paris 1993.
- Frazer, J.G., *The Golden Bough (1911–1915)*, tr. it. *Il ramo d'oro* (edizione ridotta), Roma 1992.
- Julien, M.P./Warnier, J.P., *Approches de la culture matérielle. Corps à corps avec l'objet*. Paris 1992.
- Lancelotti, A., *Feste tradizionali*. Milano 1951.
- Lanternari, V., *Festa, carisma, apocalisse. Contributi di antropologia religiosa*. Palermo 1983.
- Le Goff, J., *La naissance du Purgatoire*. Paris 1991.
- Lévi-Strauss, C., “*Le Père Noël supplicié*” (1952), rééd : Toulouse 1994.
- Lévi-Strauss, C., *Le cru et le cuit*. Paris 1964
- Mauss, M. *Œuvres*, vol.1–3. Paris 1968.
- Mintz, S., *History of Sugar* (1985), tr. fr. *Sure blanc, misère noire. Le goût et le pouvoir*. Paris 1991.
- Museo delle Arti e Tradizioni Popolari, *Pani dolci devozionali siciliani e calabresi*. Roma 1984.
- Peyrefitte, R., *Dal Vesuvio all'Etna*. Bari 1954.
- Pitré, G., *Saggio di feste popolari siciliane*. Palermo 1877.
- Pitré, G., *Spettacoli e feste popolari siciliane*. Bologna 1881.
- Pitré, G., “*La Befana in Italia*”, *Archivio per le Tradizioni Popolari*. 1893, XII, p.348–359.
- Propp, V., *Morfologia della fiaba*, tr. it. Torino 1966.
- Solinas, P.G., *Cibo, festa, fame: spartire e dividere*. In: C. Bianco, Del Ninno M. (a cura di), *Festa. Antropologia e semiotica*. Firenze 1981, p.220–239.
- Ténoudji, P., “*Les minorités invisibles: parcours d'intégration des jeunes issus de l'immigration sénégalaise dans une entreprise d'insertion en banlieue parisienne*”, à paraître, *Social Anthropology*. Cambridge.
- Turner, V., *The Ritual Process. Structure and Anti-Structure*. Aldine Publishing Company 1969.
- Uccello, A., *Pani e dolci di Sicilia*. Palermo 1976.
- Van der Leeuw, G., *Fenomenologia della religione*, tr. it. Torino 1957.
- Vidossi, G., *Saggi e scritti minori di folklore*. Torino 1960.
- Warnier, J.-P., *Le paradoxe de la marchandise authentique. Imaginaire et consommation de masse*. Paris 1994.
- Warnier, J.-P., *Construire la culture matérielle. L'homme qui pensait avec ses doigts*. Paris 1999.

[訳注]

<sup>i</sup> p.178 (S.206) 会食と混乱と消費：タイトルとしての効果を意図して、語義が重層的で頭韻が揃う3



- け入り、特にその笑いと価値転倒について考察を行った。同書は民衆文化論の古典となっている。
- xiii p.184 (S.200) サン・シルヴェストルの (la Saint Sylvestre) 夜：12月31日の大晦日を指す。古代のローマ教皇シルヴェストル（在位314-335）に因む。在世中にコンスタンティヌス帝によってニケア公会議が召集される大きな節目があった。また教皇領の法的根拠とされてきた偽書「コンスタンティヌスの寄進状」の名宛人でもある。
- xiv p.184 (S.211) “**pupi ri zuccuru**”, “**pupi a cena**”, “**pupaccena**”:ここでの伊語の語意は, “pupa” 人形, “zuccuru” 砂糖 (表記はやや変則), “cena” 夕食。
- xv p.184 (S.211) 無原罪の御やどり (Immakulee Conception) : 聖母がイエスを身ごもったとされる日。12月8日。
- xvi p.185 (S.211) “**torrone**”, “**turronari**” : “torrone” は, アーモンド, 卵白, 蜂蜜などを混ぜて焼いた菓子で, 伝統的にクリスマスの食べものであった。“turronari” はそれを扱う屋台で, ヌガーのスタンドと訳した。
- xvii p.185 (S.212) “**frutta martorana**” : “martorana” は殉教者を指す “matrio” から来ているらしく, キリスト教の祭礼に因んだ名称である。
- xviii p.186 (S.212) 灌奠 (libation) : 古代ギリシア・ローマでは, 死者の墓に酒や蜂蜜をかけて祀った。(拉) リーバーティオー (libatio)。
- xix p.186 (S.212) 聖アムプロシウス (Ambrosius 333-397) : 古代ローマの代表的な教父の一人。ローマの名門の出身でトリアに生まれ, 長くミラノ司教としてキリスト教の理論と儀礼の整備に尽くした。アウグスチヌスに洗礼をほどこし, またマリア崇敬の起点ともなる観点を示した。例祭日は12月7日。
- xx p.186 (S.212) プリニウス (Gaius Plinius Secundus 23-79) : ローマの政治家・軍人・属州総督を歴任した高官で, また歴史家・自然科学者であった。ヴェスヴィオス火山の噴火に際して調査を試み, 有毒ガスのために窒息死した。古代の百科事典とも言うべき『博物誌』が伝わる。甥の文人と区別して大プリニウスと呼ばれる。
- xxi p.186 (S.212) オウィディウス (Publius Ovidius Naso B.C.43-ca.A.D.17) : 古代ローマのアウグストゥス帝時代の詩人。ギリシア神話の多くの変身のモチーフでローマ風に歌った大作『転身譜』(Metamorphoses) の他, 『恋愛作法』などの甘美な作風を特徴とし, 『祭暦』も著した。皇帝の娘のスキャンダルに連座して黒海沿岸に流されて没した。
- xxii p.186 (S.212) 死霊を祀る (“lemuria”) : 伝説では “lémure”, 古代ローマで死霊を祀ったレムリア祭。ただし近代語では <夜行の死霊> の意味でも使われることがある。
- xxiii p.187 (S.213) 聖エリジオ (Sant' Eligio 588-659) : 聖エリギウス (Eligius or Eulogius) のことで, ノヨン (Noyon) に遺骨が伝わる。伝説では, リモージュの僧院で金細工を学んだとされ, フランク国王クロタール2世の財務官を勤め, その子息の国王ダゴベルトの信任も篤かった。639年に宮廷を去り, 741年にノヨン司教となったとされる。金細工, 種々の金工師の守護聖者とされてきた。ここでの文脈で注目すべきは, その例祭が死亡の日とされる12月1日であることであろう。
- xxiv p.187 (S.213) 「迷信一覽」(Indiculus supersitionum) : 743年のエスタンヌでの宗務会議 (Synode v. Estinnes) に因んでまとめられ, 異教的とされる迷信とそれへの対処をラテン語で30項目にまとめた記録, ドイツのフルダあるいはマインツで書き記されたと推測されている。1652年にバチカン図書館で発見された。
- xxv p.189 (S.214) 片面クレープ (crépon) : 片ちりめんの厚手のクレープ。